

『機人の夏』

松原  
慧

あらずじ

障害者スポーツの祭典、「サイバスロン」。2016年のスイスで発足し「もう一つのパラリンピック」とも呼ばれるその大会では義手や車椅子など、最新の機械が使用される。その日本版、「ヒューマスロン」の開催を志す科学者・伊能博は同級生だった車椅子の女性、南部夏樹と再会する。釜石の被災地で復興作業に携わっていた彼女は事故に遭い、脊髄損傷の大ケガを負ったのだ。

夏樹はパラリンピック選手と結婚し、夫のように歩けない自分に劣等感を抱いていた。博の造ったパワードスーツ（ロボット服）の力でもう一度歩けるようになると知り、彼の選手団である「チーム機人」に参加する。

ヒューマスロンの予選会に出場した夏樹は意外な好成績を収め、義足のランナーである夫とも、パワードスーツレースで競うことに。夏樹は夫婦対決を制し、別居していた夫と和解を果たすが、やがて悲報がもたらされる。夫が駅で争いに巻き込まれ、轢死した……。―無力な障害者だったために夫は殺された。競技に勝ち続けなにかぎり、障害者の生きる価値なんて0のままだ」と思いつめる夏樹は、必勝を期して、ヒューマスロンの本戦に挑む。無茶な特訓にあけくれ、負けた仲間に難癖を付け孤立する彼女を救ったのは、ライバルであるスイスチームの選手、マヤだった。

彼女は紛争地での地雷撤去作業中に爆風を浴び、夏樹と同じ半身不随になった。未来の技術が発達し、この足をまた動かせるようになったら、再び戦地に戻りたいとマヤは語る。目先の競技より大きなものを見据え、自身が障害を負った原因――原点到に打ち勝つことを目標とするマヤに、夏樹は強く胸を打たれる。決勝でスイスに敗れた夏樹は、建設会社に再就職して釜石へ赴く。そこが彼女の原点だ。いずれ博が、最先端のスーツを造るだろう。夏樹はそれを着て自在に歩き、壊れた家屋を建て直すようになるのだろう。そんな未来の来ることを、今や夏樹は信じて疑わなかった。

登場人物

南部夏樹(30)

脊髄損傷の女性

伊能博(30)

ロボット技術者

岡大輔(32)

夏樹の夫、義足の競技者

野辺克志(48)

競技者・義手

加賀瞳(23)

競技者・脊髄損傷

江場昭文(37)

競技者・四肢麻痺

加藤信宏(25)

競技者・義足

河野光昭(38)

競技者・脊髄損傷

豊河誠(56)

建設会社社長

戸沢章子(45)

ホームヘルパー

岡信俊(75)

岡大輔の父親

マリーヤ・マリニヤク(33) スイスの競技者

中年男

所轄署刑事

実業家風の男

メトロの乗客

マスコミ記者

豊河建設社員

マリーヤの通訳

夏樹の同級生女子

映画学校の学生たち

ヒューマシアン選手・観客

他

○ 豊河建設・屋外テスト工場（六年前）  
銀色の手が鉄骨を掴み、持ち上げる。  
巨人と見まごう体躯。蟹のようなアーム、  
角張ったボディと扁平な足。  
胸に「*humanite*」と筆記体のロゴ。  
人のかたちをした人ならざるマシン――  
工業用のパワードスーツ（ロボット服）。  
その採用テストが行われている。  
マシンの中に白衣を着た伊能博（24）が  
搭乗し、内側から操作している。  
80 kgを超える鉄骨を束ねて悠然と運び、  
なめらかな動作で荷受場に積む。  
制服姿で見学する豊河建設社員。  
ひとりが感に堪えたように呟く。  
社員「機械と人間。「人機一体」ですか……」  
他方、人の輪から離れ仏頂面で見つめる  
豊河社長（56）の姿がある……

○ 岩手県釜石の復興現場  
津波で倒壊した校舎を眺める作業着姿の  
南部夏樹（24）。胸に豊河建設の社章。  
かつて体育館のあった敷地に立ち、黒い  
瓦礫の間から凧いだ青い海を見る。  
顔の割れた陶器の人形を拾う夏樹。  
往年の鉄人口ボットを模した品だ。  
一台の油圧ショベルが近づき、  
作業員「夏ちゃん、被害の大きさを考えるな。  
圧倒されてちゃ仕事はじまらんぞ」  
夏樹「ああ――（と我に返って）はい」  
作業員「祈るなら、全部建て直してからだ」  
夏樹は自分のショベルに飛び乗る。  
T 「2011年 盛夏」

○ 豊河建設・本社社屋  
凶面箱を抱え廊下を歩く豊河社長。  
豊河「業務の邪魔だ。退くか、手伝ってくれ」  
正面床にあぐらをかいた博。無言で立ち、  
凶面の半分を受け取って歩き出す。  
なかば目を隠す海藻のような前髪。  
博 「納得できません。なぜ不採用なのか」

豊河「零細のウチにロボを買い付け余裕はない。おもちゃ片して研究室へ帰んな」  
博「ロボットではなく。パワードスーツです」  
豊河「東北じゃ何万人が津波に攫われて国の一大事だ。家を失った者はその何倍もいる。お宅のスーツで家は建て直せんだろう」  
博「被災地に無償で貸し出す案も——」  
豊河「傷ついた土地でそんなもの、誰が使う。あんたの発明は誰のためにあるんだ？」  
真顔で問う社長に博はたじろぐ。  
博「……弱い人です。たとえば震災弱者。障害者とか、介護の要るお年寄り……」  
豊河「不合格だ。俺は誰のためにと訊いた。年寄りや障害者って名前の人間はいない」  
胸を衝かれて立ちすくんだ博に、  
豊河「夏樹の同級生と聞いてテストしたのに、とんだ時間のムダを食っちゃまった」  
凶面を取り上げ社長は歩き去る。

○ 復興現場

夏樹がシヨベルで瓦礫を片付ける。  
玉の汗が浮いた、ひたむきな横顔。  
夏樹M「いとこの一家が釜石に住んで……私から手を挙げて、復興作業に参加したの」  
突如、突き上げる衝撃に車が揺れる。  
——地の底から弾けるような余震だ。  
コントロールを失ったシヨベルが横転し夏樹のいるキャノピが剥き出しになる。  
遠くで作業員が声を張り上げ、  
「崩れるぞおっ。機体を捨てて逃げろ！」  
瓦礫の山がこちらへ傾き、夏樹は必死で体をよじってキャノピを脱け出す。  
夏樹M「女だてらにシヨベル操縦して三年。余震が起きても私だけはず大丈夫って、そんな自信がなかったと言えは嘘になる」  
背を向けて逃げる夏樹に、容赦なく黒い校舎の残骸が降り注いで——  
視界は土砂に塗りつぶされる。

○ モンタージュ（2011～2016年）

病院内、担架で救急搬送される夏樹。  
タオルを噛んで激しい痛みを耐える。

I C U。背中×の緊急手術が行われる。

夏樹の脊椎にメスが入れられ、ひととき  
大きな陶の破片が摘出されていく。

それは顔の割れたあの鉄人の――。

夏樹 M「胸椎 10 番、脊髄の完全損傷。神経も  
根本からスッパリでもう二度と歩けない。  
命があるだけ運が強いって皆が言ったわ」

怖々と車椅子を動かす夏樹。

並木道でリハビリを行っている。  
ジョギング中の岡大輔(26)が道を来て、  
夏樹は彼の右足に目を奪われる。

――膝から下がバネ式の義足だ。

見とれた夏樹が前方向につんのめると、  
爆発的に加速した岡が追いつき、地面に  
ぶつかる前に彼女の体を支える。

夏樹 M「右足にジェットエンジンが付いてる  
みたいだと思った。岡大輔。天才パラリン  
ピック選手。それが出会いだね、旦那との」

夏樹の頬を軽く叩き、走り去る岡。

銀色に光る義足を夏樹は見つめる。

軽快に舗道を走るユニフォーム姿の岡、  
その背景が陸上競技場に変わり――

晴天のオリンピック公園競技場。

T 「2014年 日本パラ陸上選手権」  
走ってスタートラインに着く岡。

夏樹は障害者席で両手を組んで祈る。

岡、風を巻いて走り出すと義足のバネを  
限界までしならせて踏み切り、大跳躍。

電光掲示板の記録は6mを超えた。  
大歓声の中、岡は両手でハートサインを  
作り客席の夏樹へ投げキスを贈る。

夏樹 M「彼しかもう見えなかつたよね。ああ、  
私はこの人と生きていくんだ。大輔と一緒

なら、私の未来もきつと拓けるって……」

連勝を続ける岡の雑誌記事。

『快速ジャンパーパラ五輪選出』『鳥人、世界へ』『あす決勝 なるか表彰台』とスライド式にめくらられていき……

リオパラリンピックの3位表彰台で満面の笑みを浮かべ、メダルをかざした岡のスタイルが現れる。

『おめでとう銅メダル 新婚に花添えた』

小さな教会でウェディング。

岡と夏樹がバージンロードを進む。

車椅子の目線に岡が合わせ、誓いのキス。

男の声「——スマセン、フィルム切れました」

○ マンション・夏樹の部屋（2017年）

ソファに座る夏樹（30）の傍で、年若い撮影クルーが立ち働いている。

ドキュメンタリーの撮影であった。

ハンディカメラの蓋を開く監督に、

夏樹「話、長いかしら。もっと端折ろうか？」

監督「いやいやうちの自業自得なんで、今時

8mmで卒業映画撮ろうとか……あのこれ、

オフレコで全然構わないんですけど」

夏樹「べつに録ってもいいけど。何？」

監督「まだ一年も経ってないのに——」

夏樹「旦那と別居したのは、どうして」

監督、先回りされ小刻みにうなづく。

夏樹「……君はさ、どんな答えを聞きたいの。

こういう体の私に取材して、どんな答えが

世間のいわゆる特ダネだと思う？ 真剣な

答えか、ちよつとふざけてゴシップな方が

いいのか。強い女か健気な女か。世の中は、

どっちの障害者像を観たいんだらうね？」

監督「……ええと」

夏樹「分かんないよね。私も分からなかった。

脊髄損傷の私に、周りが何を求めているのか」

黒ズミの浮いた壁紙を見る夏樹。

× × ×

再び遡ること約半年……

まだ新しい壁紙の前で、マスコミ数社のフラッシュを浴びる岡と夏樹。

「五輪以降の暮らしはどうです」「次の目標は世界新ですか」「もつと近づいて、アゲマン妻との2ショットで」「夫婦でパラリンピック出場とか、無いですかね」「アベックメダルなんて最高だよな」と不躰なさざめきが飛び交っている。車椅子の上で身を縮めている夏樹。

岡 「あの、冗談言うの止めて貰えんですか」マスコミ連の雑音がびたりと止む。

岡 「これはそんなのと違うんです。家内はスポーツには全く不案内で……メダルってそんなに安く口にしなくて欲しい。それ、アスリートには最大級の侮辱ですから」白けた記者が顔を突き合わせる。

夏樹M「でも、私に対する侮辱とはいわれない。コレとか家内とか、そんな言葉で括られる私に、旦那は何をして欲しいんだろう」

× × ×  
車椅子の辛い姿勢で鍋を振る夏樹。ひよいと手を伸ばす岡が鍋を奪い取り、手早く料理を完成させて歩き去る。

岡 「……酢豚にどんだけ時間掛けているの」夏樹は鍋を見て、岡の右足を見る。室内用の義足を着けた岡の足は一見して健全者と何ら変わるところがない。

夏樹 「私さ。私の足さ、もう要らないよね？私さ、あんたに何もしてやれないよ。私にできて、大輔ができないことなんてない」振り向く岡。自分の腿を叩く夏樹。

岡 「ナツ。言ってる意味が分かんねえよ」夏樹M「今思えば、毎日が遠征につぐ遠征で大輔もささくれ立ってたんだ。小さな傷が塞がり切らないヒビに育って……、壊れた」感覚のない足をお玉で叩き続けて、

夏樹「お別れしようって言ってるんだよ……。二本が揃っても動かない足なら、無い方が自由に跳べるでしょ。大ちゃんみたいに！」

岡

「……ああ。そうだな」

夏樹が壁へと鍋を投げつける。  
× 具材が飛び散り壁紙に模様を残す。

× 今ではただれたような壁の黒ズミ。

夏樹「信じなくてもいいけど今でも夫を愛してる。身を引いたの、私といたら彼の翼を自由に広げられないから。プロ選手として大輔を心から尊敬するし喜んで応援する。また三年後の東京じゃ、パラリンピックのてっぺんに立つ彼が見たいわ、今度こそね」

語る夏樹に圧倒されている監督。

放置された8mmカメラを見やり、

夏樹「……最後もうワンテイク行こうか？」

○ T 「同・夏樹の寝室（夕）  
「三週間後」

どこかで電話が鳴り続けている。

ベッドで毛布を被った夏樹、それが床に転がった子機の呼出音だと気付く。体をねじ曲げて拾い「はい」と出る。

女の声「あもしもし夏ちゃん？ 戸沢です、

ヘルパーの。ねえ、車椅子でダンスできる

バー見つけたんだけど行かない？ どうせ

今までウダウダ寝溜めしてたんでしょ」

夏樹「……大きなお世話だったの」

夏樹は毛布ごと床に滑り落ちる。

○ バー・ダンスフロア（夜）

円型に設えられた舞台で、戸沢（45）に

手を引かれ車椅子を踊らせる夏樹。

× ハンドリムを操る軽やかな手さばきに、

× 周囲の客から自然と拍手が起こる。

× 隅のカウンターで飲む夏樹と戸沢。

戸沢「夏ちゃん意外と運動もいけるのよね。」

旦「旦那がスパーマンで埋もれがちだけど」

夏樹「六年間も比べられ続けたんです」

戸沢「パラリンピアンのお房だからって？」

夏樹「岡の彼女にしては。あの旦那の割に。」

お蔭でほとほとスポーツ嫌きらいですね」

バーテン野辺克志（48）、来て「素敵なダンスにサービス」とカクテルを置く。

夏樹「（礼を言いかけて）……！」

野辺の右手は義手であり、メカニカルなデザインは装飾的でとても美しい。

夏樹にウインクして歩き去る野辺。

戸沢「夏ちゃん、サイバスロンで知ってる」

夏樹「は？」

戸沢「障害者のスポーツ大会。五輪と同じで四年に一度開くんだけど、ロボット技術で造られた義手とか車椅子を使って争うの。サイボーグたちのオリンピックとも言われて、あすこのバーテンその選手らしいよ」

夏樹「へえ……」

戸沢「うっすい反応。甲斐がないわねえ」

夏樹「勝負事にはこりごりなんですよ」

戸沢「まだ旦那に取り憑かれてる。吹っ切るために映画デビューもしたんでしようが。ドキュメンタリーはどうなったのよ」

夏樹「先週末に学生の上映会があつて」

戸沢「OB連や教授も来るんだったよね？」

夏樹「面倒なんでブッチしちゃったんです」

戸沢「次の恋でも探しやよかったのに——」

俯く夏樹に戸沢は口調を改め、

戸沢「冗談はともかく、人とは交わりなさい。バツイチ車椅子が独りで生きて行けるほど福祉インフラ整ってないわよ。この国は」

○ 同・表（夜）

店員の介助を受けて店を出る夏樹、戸沢。

夏樹「ここでサヨナラ？」

戸沢「送らないわよお。逞しく生きなさいな」

千鳥足で夜の雑踏へと消える戸沢。

肩を竦めた夏樹は車椅子を反転させる。

——接触。反動で後じさる夏樹。

白衣の男が仰向けに倒れている。

夏樹「（ぶつかつたと気付き）すみませ……」

ワカメのように伸びた髪。男は博（30）。博はやおら立つと懐から古びた学生証を

博 取り出す……「2年C組 南部夏樹」の。  
「探してた。——見つけた！」

博 学生証を目前に突き付ける博。  
夏樹は回れ右して一目散に逃げ出す。

○ 商店街をひた走る車椅子（夜）

博 ホイールを前に放り投げるような独特の  
走法で全力疾走する夏樹。速い。

博 息を喘がせ必死で追う博、  
「何で逃げんだよっ。話、聞けって」

博 歩道橋のスロープを駆け上る夏樹。

博 脇腹を押さえた博が階段で停まり、  
「待てって。今更恨みに思うわけねえよ。」

博 探してたんだ震災の時から！  
——探り出すように叫んで倒れ伏す。  
酒の回った夏樹も橋の上で嘔吐。

○ ワンルームマンション・表（夜）

博 4階建てだが小綺麗な外観。福祉対応の  
広いエレベーターに乗る夏樹と博。

博 夏樹「大学ベンチャーってさ、儲かってんの」  
博 「……何で」

博 夏樹「設備とかいいところ住んでるなって……」

博 「3階から落ちても大丈夫そうだろ？」  
髪を掻き上げる博、額から左眉にかけて  
細長い鉤裂きの古傷が走っている。

夏樹 「……」

○ 中学校・調理準備室（回想・十六年前）

博 腰高窓が人の形に砕けている。

博 開いた穴から外を見下ろす夏樹（14）。

博 駐輪場のアルミ庇が深く陥没し、窪みに  
半裸の博（14）が倒れている。

博 ねじれた足首。上半身は白い液体に濡れ、  
ガラス片でザックリ割れた額から広がる  
血の湖と混じり合って、紅白のマーブル  
模様を底に描き出している。

博 傍に転がる夏樹の学生証……

博 の声「一歩間違えればお前じゃなくて俺が  
半身不随になってたはずなんだ」

○ マンション4階・博の部屋（夜）

研究者らしく基盤やケーブルが散乱した室内で飲み直す夏樹。博は烏龍茶。

夏樹 「やっぱ今でも根に持ってるじゃんか」

博 「人生は不思議だって言いたいんだよ。」

あの時死ぬ目に遭わなけりゃ、たぶん俺がロボット工学に携わることなかった」

夏樹 「ロボットね……」

円盤状のお掃除ロボが室内を動き回り、夏樹の車椅子に纏わり付いている。

○ 調理準備室（回想）

椅子に縛られた博に、夏樹を含む女生徒数人が大量の牛乳を浴びせて笑う。

パンツ一枚に剥かれた背中に「バカ」とホイップクリームで字を描く女子。

博の声「この手で超人を造りたいと思った。」

スパーマンを造って、こんな奴らいつか手も触れられないように蹴散らしてやる」

その手に握り締めた鉄人のフィギュア。

「貸させて」「観念しろよ糞オタク」と奪われかける博、全力で縛めを振り解き、

夏樹の制服から学生証をくすね取る。

夏樹 「ふざけんなよモヤシが。殺すぞ！」

発作的に駆け出した博、窓を突き破って

3階の高さから遙か地上へと落下。

夏樹の取り巻きから悲鳴が上がる。

○ 元の部屋（夜）

夏樹 「ごまあ見ろって感じだ、それじゃあ。」

私を探して見下したかったんだろ？」

博 「……」

夏樹 「因果応報。あんたは必死に勉強して、

ロボティクス・ベンチャーの若きCEO。

かたやイジメっ子の私がヘタ打って車椅子

……神様は見てるって感じ、するでしょ」

博 「そんなじゃねえと言ってるだろうが」

夏樹 「へえ、じゃ何だろ。ボランティア精神？

バイト紹介でもしてくれんのかしら」

博 「ドキュメンタリー観た。先週の」

夏樹 「……」

博 「ロボって言っても開発分野は色々でさ、今やりたいのが介護福祉なんだ。あの手の上映会には大体顔出すようにしてる」

夏樹 「……ボランティアよりタチ悪かったな」

博 「あ？」

夏樹 「つまり押し売りでしょ。旦那と別れて半身マヒの女独り、よつぽど不自由そうに見えた？ “目玉商品はお喋り犬型ロボ、老後のボケ予防にもこれ一台で安心！”」

博 「止める。アホらしい」

夏樹 「そっちこそ止めて、要らないお世話」

博 「——どうしてお前はそう卑屈なんだ」

夏樹 「はあ？」

博 「旦那が有名人でプロアスリートだと、妻は引け目を感じなくちゃいけないのか。引退するまで別居を続ける気か？」

夏樹 「そんなの誰も言っていないんだけど」

博 「お前が岡と暮らせないのは彼が誰より遠くまで跳べるからじゃない。誰より速く走れるからでもない。ただ歩けるからだ。義足だろうと二本の足で立てるし、動ける。」

夏樹 はそれが疎ましくてならないんだろ」

夏樹 「違う」

博 「同じ障害者でも誰憚らず、胸を張って生きる人がすぐ傍にいる。超えがたい壁を軽々超えていく人がいる。それがどんなに辛せでどんなに残酷な奇跡か、俺にもその半分ぐらいは意味が分かってるつもりだ」

夏樹 「……」

博 「壁をさ、超えてみたいと思わないか」

夏樹 「え？」

博 「バイトだよ。俺が紹介する。その気があるなら明日8時、グランシテイ前集合だ。一歩でも前に進む気持ちがあるなら」

夏樹、小さく顎を動かさうなずく。

○ グランシテイ国際展示場・中（朝）  
医療機器等のショウ会場である。

人工知能や3Dプリンタ、ホログラムと最新科学の粋を集めた展示品がずらり。博と夏樹がブースを縫って進む。

あちこち目移りする夏樹を横に腕時計型ウェアラブル端末に話しかける博。

博 「パワーアシストスーツ、ユマニテ」

機械音声 「ブース36。ルート案内します」

案内に従い会場を進むと、“*humante*”と書かれたブース看板が見えてくる。

そのふりがなを読む夏樹、

夏樹 「ユマニテ？」

博 「ヒューマニテイ、人間性。フランス語」

夏樹 「じゃなくて……」

なぜかバツ悪そうに博は鼻を擦り、

博 「うちの屋号だよ。俺が起こした会社のブースの壁面に『義肢製作に革命を！』

*Go to Cybathlon, 2020*』というスローガンが記されているのを目に留める夏樹。

夏樹 「サイバロン——え、これって」

博 「ちょうど時間だ。砂かぶりで観ようぜ」  
車椅子の背をいそいそ押していく。

○ 同・ブース内・特設会場

恐縮しながら人込みを分ける夏樹、博と並んで前列の身障者席に陣取る。

ブルーカーペットの舞台を見上げると、場の光景に夏樹はギョツと固まる。

車椅子の外国人女性が主として下半身を支える細身のマシンを纏っている。

博 「強化外骨格。パワードスーツの一種だ」

目を奪われる夏樹。女性は樹脂製の杖を突き、車椅子から体を持ち上げる。

夏樹 「え——？」

立ち上がった女性が足を踏み出す。

右、左、右……とぎこちなくだが確実に絨毯の上に歩を進めていく。

夏樹 「嘘……。歩いて、るの？」

にやりと笑みを浮かべる博、

博 「彼女もTh10損傷。夏樹と同じ脊髄を傷つけられた患者のひとりさ」

夏樹「！」

博「うちの本当の目玉商品。パイロットを探してるんだ。テストに協力してくれたら謝礼も弾む。悪い話じゃないだろ？」  
女性が舞台を往復し車椅子に戻る。  
筋肉の削げ落ちたその足で歩いたとは、いまだに信じられない夏樹――。

○ 同・展示会場

通路を進む博と夢心地の夏樹。  
傍の大きなブースで歓声。ふと車椅子を向けた夏樹が凍り付いたように停まる。  
舞台に伸びたレーンとマット。  
レーンを走る義足。白いマットを目がけジャンプを決める岡の姿がある。  
ブース壁面に、大きな足の描かれた社章。  
博「この社は義足のシェアNo.1だ。当然、トップ選手の岡大輔とも契約してる」  
夏樹「知ってて私を連れてきたのね？」  
博「憎みあつて別れたわけじゃないだろう。うちも彼には野暮用があるもんでな」  
試技を終えた岡が振り返り、夏樹の姿を認めるもののすぐに目を逸らす。

夏樹「……」

○ 同・会場内のカフェ

バリアフリーの広々とした店内。  
丸テーブルを夏樹、岡、博が囲んで座り、中央に注文用のタッチパネルがある。  
気塞ぎな沈黙を博が破って、  
博「岡選手。お会いできて光栄です」  
岡「どうも。うちのと同級だそうですが、友人の少ないやつだものでね――」  
夏樹「もうウチじゃない。大きなお世話よ」  
岡「ナツ。何をそんなに尖つてんだよ」  
そっぽを向いて紅茶を啜る夏樹。  
博「好調ぶりは伺ってます。二度目の五輪、東京パラリンピックへ視界良好ですね」  
岡「ここだけの話だけどね、伊能さん。俺、オリンピックにも出るつもりですよ」

博 「とというのは、つまり……」

岡 「健全者に交じって跳ぶんです。義足のジャンプを巡る議論については、科学者のあなたであればご存知のはずだよね」

博 「ドイツの選手がオリンピックピックに参加を希望して、断念したケースがありましたね。普通の足より義足は有利だと言われて」

岡 「義足はドーピングと同じだとね。ふざけた話ですよ。俺らが血の滲む努力をして記録を伸ばしても、陸連のお偉いさんには道具のお陰だと思えない。だから皆の目の前で健全者のアスリートを負かして、俺自身の能力を証明してやりたいんだ」

夏樹 「……できると思ってるの、本当に」

夏樹 呟いた夏樹を岡は目の端に入れ、

岡 「できるできないを考えたらずが止まる。

やると決めたら実現するまで食らいつく、俺のモットーだと言わなかったか？」

夏樹 「……」

博 「見て頂きたいものがありました」

博、タッチパネルを操作し岡に向ける。

モニタに現れたのは外国の室内競技場。

義足の男がソファで屈伸運動、飛び石を踏んで歩く等の課題をこなしつつ懸命にゴールを目指す。障害物競走の様相。

夏樹 「なんかサスケとかそんな感じ……」

岡 「——サイバロン、ですね？」

博 「ええ。去年に初の世界大会が開かれた。

現地のチューリヒではもう一つのパラリンピックとして大きな期待を集めています」

岡 「ただの義足じゃないみたいだね。かといつて陸上用のバネ義足とも違う……」

博 「コンピュータ制御のロボット義足です。

蹴り出す力に特殊な回転を与える」

動画が終わる。モニタを戻す博、

岡 博 「ご感想を伺いたかったんです」

「……試みとしては面白いよね。こんな義足が世界に溢れて使われるようになれば俺らの暮らしはずつと向上する。ひとりの障害者としてそんな未来を夢見ているし、

応援もしたい。ただね……。アスリートとしての意見を求めてるなら、答えは別です。これをスポーツと俺は呼びたくない」

博 「……」

岡 「パラリンピックは世界に一つだけです。エキシビジョンとしては結構だけど」

夏樹「——勝負の世界に違いはないじゃない。上ばっか見てると足掬われるよ、大ちゃん」

岡 「何？」

夏樹「健全者に力を認めさせたいなら、まず同じ障害者に敬意を払うべきでしょ。同じルールで競争したらサイバスの選手に手も足も出ないかもしれない」

岡 「ふん。なら、試してみようか」

夏樹 「……」

岡 「試合ならいつでも受けて立つ。ナツが俺の競争相手になってくれるのか？」

博 「岡さん」

岡 「……大人げないと思うでしょうがね、競技に関して妥協はできないんです」

義足の上にブーツを履いて席を立ち、

岡 「俺の人生すべてをなんだよ、スポーツは」  
歩き去る岡をただ見送る夏樹たち。

○ 国際展示場・帰路（夕）

動く歩道。夏樹の車椅子を押す博。

夏樹 「正直、試合とかまだ分からないけど」

博 「うん？」

夏樹 「私を乗せて。その、パワードスーツに」  
博 「……いいのか」

夏樹「白々しいね。あなたの思惑通りでしょ？サイバスの夫がイエスと言えばよし、ノーでも私を引き込む理由になる」

博 「夏樹に損はさせない。約束するよ」

夏樹「いいよ。私を使って、伊能博士。あのスーツとなら壁を超えられる気がする」

博 「——よし。あすから大学で合宿だ」  
腕を伸ばして固く手を握る二人。

○ 大学・人機共同研究科・体育棟（朝）

競輪場のような円形のコース上を一台の平たい三輪バイクが走行している。操縦する加賀瞳（23）、寝そべるような後傾姿勢で背後の一輪に体を預け、前の二輪をリズムよく漕ぎ動力とする。ゴールインする瞳に夏樹が近づき、

夏樹 「瞳ちゃん！ 凄い、ナイスラン」

ヘルメットを脱ぎ親指を立てる瞳。

タブレットに記録を取っていた博、

博 「さすが若いな。FESの習得が早い」

瞳 「上体の力は抜いた方がいいみたい」

夏樹 「ほんとに足は動かないのよね？」

瞳 「ま、ホントにってか普段はそうだけど。

博 「電気を送って筋肉を動かしてるから、

麻痺した足でもペダルを漕げる。FES、

機能的電気刺激バイクの基本原理だ」

瞳 「気持ちいいね。オフロードで事故って

からこっち、二度とバイク乗る機会なんて

ないもんだって諦めてたからさ」

夏樹 「カッコ良かったよ、瞳ちゃん」

瞳 「夏ちゃんだってもうすぐ乗れますよ。

スーツのメンテもあと少しでしょ？」

博 「最後のオーバーホール中。その間に、

チーム皆と顔合わせ済ましちやおう」

○ 同・レクリエーションルーム

中央壁に埋め込まれた大型モニタ。

左右に二人の男が座り、電極の繋がれた

ヘッドギアを被り頭を垂れている。

瞳 「（夏樹たちと入室し）まだやってたの？

どうやったって和尚に敵わないのに」

モニタ上で二頭身のコミカルなアバター

（分身となるキャラクター）が競走中。

針の山や断崖を越えていく障害レース。

左のアバターが大差を付けて勝利すると

右手の男がヘッドギアを脱いで、

「やあ負けだ、完敗。お見逸れしました」

美しい義手を動かして頬を掻く。

覚えのある装飾美とその容貌に、

夏樹「……バーテン？」

男——野辺克志、しばし考えて。

野辺「ダンサー。やあやあ、奇遇じゃないか」  
知り合いか、と視線で問う博にグラスを  
傾ける仕草の夏樹。酒場で……の意味。

博「野辺克志さんだ。強化型義手レースの  
パイロットで、うちでは唯一サイバスの  
に出場経験がある。偉大なベテランだよ」

野辺「まだまだ年寄り扱いは早いぜヒロ君。  
歴史の生き証人みたく言わないでよ」

その掛け合いをニコニコと見つめる男、  
江場昭文（37）。濃い髭面、博が帽子を  
外すと見事なスキンヘッドである。

博「もうお一方が江場昭文さん。進行性の  
難病で四肢麻痺を患っていらっしやるが、  
脳波でアバターを操るBCI……」

瞳「さっき野辺さんがボロ負けしたやつ」  
博「脳コンピュータインタフェースレース、

この扱いはエキスパートだ。並の健全者が  
束になっても到底、太刀打ちできない」

野辺「僧侶じゃないが和尚とお呼びしてる」  
微かにうなずく江場、仙人のような笑み。

夏樹「南部夏樹です。よろしくお願いします」  
車椅子の夏樹は姿勢を正して一礼。

○ 同・運用試験場

パワードスーツの搭乗テスト——  
車椅子に座ったまま博の介助を受けて、  
強化外骨格を着込んでいく夏樹。

補助杖を受け取り「さあ」と促されるが、  
夏樹「——嘘でしょ。駄目、ありえないって」  
青ざめびくとも体を動かさせない。

博「難しく考えるな、立つだけだ。立てる。  
足を動かせ。一歩でも前に進めればいい」  
義手の腕を組んだ野辺と車椅子の瞳。

野辺「なかなか無茶な要求をおっしやる」  
瞳「うーん……ヒロさん研究者としては、

花マルクラスに優秀なんだけど」  
野辺「そこは健全者だ。動かない体を動かす

ことが、僕らにとってどれだけ難しいか。

想像しろっていうのも酷だよね」  
江場「……」

江場は変わらず柔和な笑みで見守る。  
次第とパニックに陥る夏樹、脂汗を流し自分の荒い息遣いを聞いている。  
暗く狭まる視界。足下を見ると黒い水が床一面に広がっていく。それは被災地で彼女を襲った泥水——いや、土砂だ。  
気付けば足首まで泥濘に浸かっており、嵩を増す土砂から逃れようと必死で体をよじるが全く抜け出せそうにない。  
恐怖に叫び出しかける夏樹の耳に、  
野辺「夏樹くん、ダンスだ。想い出せ」  
夏樹「！」

野辺「踊ってる間、車椅子は君と一つだったはずだ。君と機械が別々にあるんじゃない、二つはすでに一体なんだよ。スーツは君の足そのものだ。車椅子と同じ、君の仲間だ」  
呼吸が鎮まる。黒い土砂に杖を突いた。  
あらん限りの力で身を持ち上げる夏樹。  
泥濘から足を抜け出した、刹那——  
バランスを失い前方につんのめる。  
咄嗟に博が脇から体を支え、  
「グッドだ、夏樹。よく頑張った」  
体を預けて立ち、目を閉じる夏樹。  
脛の裏にはかかってその高さから眺めた、釜石の青く凪いだ海が映っている。

○ 同・大会議室（夜）

ささやかな歓迎の酒宴が催される。  
三基の車椅子。つまみを運ぶ野辺と博。  
野辺「それでは新メンバー夏樹くんの加入と、踏み出した文字通り偉大な一步を祝して」

瞳「乾杯っ！」  
叫ぶや缶の発泡酒をぐいぐい呷る瞳。  
学生がケアし、誤嚥防止のストローから薄めたワインを江場は旨そうに啜る。

夏樹「——ヒューマスロン・ジャパン？」  
博がフライヤーを渡し、怪訝に読む夏樹。  
「サイバスの国内版。非公式だけど、

うちの主幹でやっと開催まで漕ぎつけた。  
お前の分もエントリーしといたからな」

夏樹「……」

博「大会なんてイヤと思うかもしれないが  
仕方ないんだ。パワードスーツは高価だし、  
民生用に貸し出す試験段階でもまだない。  
今後も夏樹に乗って貰うために……」

夏樹「あのさ。本音で言っただけだ」

博「ん？」

夏樹「私である必要ってさ、あつたのかな？  
瞳ちゃんみたく元アスリートじゃないし、  
江場さん並みのセンスや技術も……まして  
野辺さんほどの経験があるわけでもない」

博「……」

夏樹「サイバロンには義足レースもある。  
本当は大輔を誘ったかつたんじゃない？」

博「いつしか耳を傾けている野辺、瞳、江場。  
温んだ緑茶を博は一息に飲み干し、

「暑かったよな。あの夏——震災の年に」

夏樹「え？」

○ 豊河建設・屋外テスト工場（回想）

ざらりと日差しを跳ね返すロボット服。

博の声「パワードスーツを売り込みに行った。  
豊河建設、夏樹の元いた職場の社長にさ。  
けんもほろろに断られたけどな」

○ 元の会議室（夜）

夏樹「……うん。聞ってる」

博「超人を造りたかつたんだ。何より強く、  
精密に動くスーツを造ればそれでいい……  
俺の技術で世間をあっと言わせたかつた」

夏樹「独りよがりになっちゃつたんだ」

博「誰のためとかユーザー目線で考えて、  
小さく纏まりたくなかった。じきにお前の  
噂が聞こえた。被災地で人のために働いて  
……半身麻痺の大怪我をしたって」

夏樹「……」

博「負けたと思つた。プラスを積み上げて  
強いつもりになつてた俺と、マイナスから

0への復興を目指して闘っていた夏樹と。どつちが強い子供にだって分かる」

夏樹「考えすぎじゃないかな、そんなの」

瞳「(笑)ヒロさん頭でっかちだからねえ」

野辺「強さの形は人それぞれ、でいいのさ。僕らはチーム・フリークスなんだから」

と、フライヤーの参加社一覧を指差す。

『(株) humanie:チーム機人』とある。

夏樹「チーム……キジン？」

江場が電動車椅子を夏樹の傍に寄せて、わずかに動く指で液晶端末を操作する。

「機人≡奇人≡freaks」と画面表示。

瞳「ダジャレ、野辺さんの」

野辺「機械の人であり奇抜な者共でもある。

キジン変人ハズレ者みな大歓迎だ。僕らは来る者を選ばないんだよ、夏樹くん」

博「その通りだ。ようこそ機人の世界へ」

野辺「ちなみに一番のフリークは彼だからね」  
笑いさざめく一同。頭を下げる夏樹。

目尻に浮いた涙をそつと拭う。

夏樹M「——今年の夏も、熱くなりそうだ」

○ ヒューマスロン予選会場・表(朝)

風に翻る「Humathlon Japan」の幟旗。

T 「6月予選会当日」

スポーツパークに人が集まっている。

プレスエリアにカメラの放列。一般客も健全者と視聴覚・肢体不自由等障害者が半々ほどに列を作り、盛況の様子。

テントの下で体を作る選手と二人三脚で彼らのマシンをメンテする研究者。

多彩な形のサイバー義手や義足、外骨格——その有り様に圧倒される夏樹。

夏樹「うわ……」

のんびり義手で額に庇を作る野辺、

野辺「けっこう人が集まるもんだねえ」

瞳「オフロード大会を想い出すな。ってか、

野辺さんスイスの本場も経験済でしょ？」

車椅子の上で首をストレッチする瞳。

博「パラリンピックをきっかけに日本でも

障害者スポーツに関心が高まってきてる。  
岡大輔やパラの選手たちが敷いたレールを  
更に伸ばすか台無しにするかは……」

江場「……」  
笑みの中にも闘志を秘めた江場。

博 改めてチーム機人の面々を振り返る博、  
「この大会の成否に掛かっている。我々も  
出来る限りのバックアップを務めますが、  
大きな鍵を握るのはやはり選手の素晴らしい  
プレーだ。健闘を期待しています」

瞳 「お、なんか開会宣言っぽい」

拍手する瞳と裏腹に、口数の少ない夏樹。

野辺 「緊張してるか？」

夏樹 「しっかり練習したつもりだけど……。  
いざ本番となると、眠れなかったですね」

博 「一人で勝とうなんて気負わなくていい。

これは団体戦だし、うちみたいに予選から  
4種目にエントリーするチームは少ない」

野辺 「技術水準が足りなかったり、そもそも  
選手がそれだけ揃わなかったりだね」

夏樹 「足引つ張らないよう頑張ります」

瞳 「あたしと江場さんで2勝すれば負けは  
ないし、楽しんでレースしてきて下さい」

野辺 「あ、僕は計算に入らないのね……」

苦笑する野辺に場の空気も解れる。

自然と各々の手を繋ぎ、円陣を作る一同。  
動かない江場の手と野辺の硬質な義手に  
触れ、夏樹はふと目を閉じて祈る。

博 「……今日のレースを覚えていて欲しい。

競技を離れて家に帰っても、障害者として  
前を向いて生きる選手たちの心に少しでも  
宝を残せるよう、この大会は開かれました。  
一人一人がその財産を見つけるように——  
20年後も記憶に残る試合をしましょう」

野辺 「さてと行こうか、3・2・1……」  
“Go,Freaks,Go!!”の英字が江場の端末に  
大きく表示されると同時——  
同じ掛け声が空に響き渡る。

○ 同・室内競技場

七分ほど客も入って賑わっている。ピットエリアでスタッフの介助を受け、パワードスーツを身に着ける夏樹。隣のコースで一際大きな歓声が上がリ、一機のFESがダントツでゴール。拳を回して勝ちどきを上げる瞳。

夏樹 「瞳ちゃん……」

博 「さすがはうちの切り込み隊長だな」

「強化外骨格レースに出場予定の選手は準備して下さい」と場内アナウンス。頬を叩いて気合を入れる夏樹に、

博 「本気で走るのでれくらいぶりだ」

夏樹 「中学校以来。400mリレーで四着」

博 「よし。三着以内を目指して走れ」  
肩を叩いて博が送り出す。

○ 同・電動外骨格コース・スタート地点

夏樹を含む六名の走者がソファに座り、ブザーの合図で一斉に立ち上がる。

夏樹 M「基本のルールはサイバスロンと同じ。40mのコースに、障害となるタスクが6つ」

スタート直後にスラロームの柱。二本の補助杖——ジョイスティックを進行方向へ向け、柱の間を右左と抜ける夏樹。

夏樹 M「杖を突く位置が少し斜めにずれると、バランスを失って転倒しかねない」

緩い坂を越えると、第三の障害は一枚のドア。杖を使つて手前に開き、通り抜け、再び閉めるといふ一連のタスク。

夏樹 M「走ってみるとこのコースが障害者の日々の暮らしを想定したものだと分かる。健全者には何気ない道のりでも、足が動かない人にとっては、まるでジャングル……」

声援が飛び交い、半身麻痺の走者たちは懸命に進む。ほぼ横一線だが体力が尽き、坂道で立往生する選手の姿もある。

夏樹 M「パワードスーツが日常化されれば、もつと気軽に歩けるんだらうか？」

敷き詰められた飛び石を慎重に越えて、夏樹はゴールへまた一歩近づく。

絶え間ない呼吸、汗が目に入る。  
第五の傾斜地を辛くも乗り越えると、

夏樹 M「——あれ？」

前に行く走者はもう誰もいない。

ふと隣に目をやると最後の関門、階段の昇降を前にして苦しげに足を止めた男の走者と視線が合ってしまった……

慌てて段差を昇りだす男。無我夢中で、

夏樹もステイックに最後の力を込める。

ほぼ同時にゴールの白線をまたぐ二人。

咄嗟に旗を持つ場内係を見る夏樹、

係員「3レーンです。勝者、チーム機人！」

目前に広がる観客席がワツと沸く。

歓声を上げて走り寄る博らスタツフを、

惚けたように啞然と見ている夏樹。

○ 同・ベンチエリア

ふぬけて座る夏樹に「お疲れ様です」、

と瞳がドリンクボトルを差し出す。

夏樹「……ああ、お疲れ」

瞳「念のため聞くけど、今まで練習とかで

三味線ひいてたわけじゃないですよね？」

夏樹「いやもう夢中で———というか無心で。

一位だなんてマジに信じられない」

瞳「本番に強いタイプなのかな。まいいや、

それよりエンジョイできましたか？」

夏樹「ああ。必死だったけど、何だかさ……」

と見る先に、義手レースを走る野辺の姿。

○ 同・電動義手コース

野辺は右手の義手で洗濯バサミを操り、

左手に持った紙を紐に吊していく。

「h」「u」「m」「a」「n」と五枚の

紙を吊し単語を完成させるタスク。

どこか楽しげに課題をこなす野辺。

夏樹の声「ずーっとスーツ着ていたいなって」

瞳の声「あはっ、分かるそれ。なんか機械が

優しいんだよね。あたしのバイクも競走で

ただ一着を取るだけじゃなくて……路上で

のんびり漕いでもみたくなるみたいな」

野辺は貫禄の走りで一位を獲得する。

○ 同・ベンチエリア

夏樹 「一家に一台フリーで使えたら、きっと楽しく暮らせるだろうなとか」

瞳 「色んな夢が描けますよね」

瞳 「おお、と一隅でどよめきが上がる。

瞳 「わ、そろそろだ。行かなくちゃ」

夏樹 「なに？」

瞳 「表彰式。四勝すれば総合優勝だから」

夏樹 「あ、でも江場さんが、まだ——」

瞳 「（含むように笑って）大丈夫」  
構わず車椅子を発進させる瞳。

○ 同・BCIレース・操作席

どよめきの中心には江場の姿。

客席頭上に大モニタが配され、レースの進行状況が同時中継されている。

日頃の笑みは消え、瞬きさえせず江場は画面のモニターを精密に走らせる。

瞳の声 「集中した和尚さんに敵はないです。波で人が殺せそうな迫力なんじゃない」

他の走者の影すら見えない独走態勢。

トータル140秒を切るタイムでゴールし、付き添いの博と会心の笑顔を交わす。

○ 同・表彰台  
の形をしたパネルの裏に車椅子が並び、チーム機人がメダルを受けている。

○ 同・表彰台  
Vサインで写真に収まる夏樹。

○ 同・ミックスゾーン  
報道陣の囲み取材に応える博。

博 「：：我が社のチームも全体一位で予選通過となり、本戦に向け弾みがつきました。

人と機械が手を携えて障害を乗り越える、その素晴らしさがスポーツを通じて、もっと

社会に知られていくことを願っています」

記者 「マシンの性能が勝敗に影響するのは、フェアな競争でないと批判もあります」

記者 「マシンの性能が勝敗に影響するのは、フェアな競争でないと批判もあります」

博 首にメダルを提げた夏樹が通り掛かる。  
「人機一体のヒューマスロンにおいては、マシンも立派な戦力の一つです。考えてもみて下さい、高性能の義足を着けた選手がオリンピックに出たならその成績は道具のお陰と批判されるかもしれない……」

博 夏樹「！」  
「ですが、本大会にそういう議論の入り込む余地はありません。機械の性能を向上させることは、アスリートが自分の肉体を鍛え上げることとほとんど同じ意味を持つからです。機械と人は等価値です」

博 博の放言に不安を隠せない夏樹。  
記者「今後の展望をお聞かせ下さい」

博 「マシンと人の経験値をそれぞれ上げて、チームの総合的な力を高めたいですね」

○ トレーニングジム・サウナ室  
備え付けのテレビで博のインタビューを食い入るようにつめている岡。

博 の声「パラリンピック選手と競争しても、負けない機人を育てることが目標です」  
博の言葉に不敵な笑みを浮かべ、部屋のガラス越しに岡は事務員を手招く。  
電話を掛ける——と手真似で合図。

○ 大学・人機共同研究科・研究室（翌朝）  
自席でスポーツ各紙に目を通す博。  
多くが一面でヒューマスロン・ジャパン予選結果と博の発言を取り上げている。  
『人から機械へ スポーツ新時代到来』  
『パラリンピアンに勝てる』豪語する若き天才CEOの正体とは？』  
『義足のジャンパーが緊急記者会見』  
『岡大輔、ヒューマスロンに宣戦布告だ』  
『異種格闘技戦』  
『申し入れたと激白60分』……  
これでもかと躍る煽情的な見出し。  
博 「ボヤを大火事にまで広げる手際じゃ、マスコミの右に出る者はいないよね」  
ロボットファイギュアを片手で弄る博。

瞳 「火付けの張本人が何を言っただか。  
岡 選手もうカンカンじゃないですか」

瞳 博 「彼を名指して貶した覚えはないけど」  
「義足だオリンピックピックだ聞いてないこと喋って、機械も人も同じだみたいに言っ  
よつぽど人格者かニブちゃんでもなきや、  
分かるでしょうよ挑発されてんのは」

野 辺 「記者会見まで開いたって言うけどさ。  
向こうさんではどんな要求を？」

博 「——ハンディマツチを提案したいと」  
博はフィギュアの足を折り畳む。

○ 記者会見場（回想）

岡 「詰めかけたプレスに語りかける岡。  
「陸上競技は俺の命です。どんな条件で、  
相手が誰でも負けないことを証明したい。  
彼ら機人とはサイバソロルールで闘う。  
もちろんどんなマシンのサポートも受ける  
つもりは毛頭、ありません」

岡 自信に満ちた顔に注がれるフラッシュ。  
「マツチアッパは強化外骨格レース……  
南部夏樹選手との対戦を希望します」

○ 元の研究室

野 辺 「ははあ、それで『異種格闘技戦』か」  
『パラvsサイバー 最強夫婦対決』と  
見出しのある一紙を床に放り捨てる瞳、  
瞳 「アホか。向こうは100mを12秒台で走る  
パラ陸上のモンスターだよ。スーツの助け  
があるにしたって足の動かない夏ちゃんが  
逆立ちしても戦える相手じゃない」

野 辺 「裏を返せばこれは万馬券だね。万が一、  
怪物を打ち負かしたらヒューマソロへの  
注目を一気に集めることができる」

瞳 「……まさか、ヒロさん」  
呆れたような視線に博は顔を逸らし、  
瞳 博 「ご指名の夏樹はどこ行っただ？」  
瞳 「朝から寮に籠りきりつすよ。夏ちゃん、  
競技辞めるとか言い出さなきやいいけど」

江場「……」

江場の笑みにもいくぶん影が交じる。

○ 大学寮・夏樹の部屋（夕）

寝間着姿の夏樹が電動ベッドを起こし、向かいの壁をじつと見つめている。

リオ五輪当時の岡の写真や、雑誌記事を纏めて留めてあるコルクボード。

静かに集中を高める様子の夏樹……

懐の携帯から通話アプリの着信音。

チャット画面「〃飲み行こう！ 野辺さんの

お店でゴチですby瞳ちゃん〃」

なぜか小鹿のスタンプが付いている。

フツと笑って夏樹は体を起こす。

○ 野辺のバー・カウンター席（夜）

ヤケ気味にグラスを振り回す瞳、

瞳 「まあこうなったら当たって砕けるでさ、

夫婦喧嘩に付き合ってたげてもいいかもよ。

どだいこっちは負けて元々なんだし」

夏樹「うん……」

生返事の夏樹。野辺が器用に氷を削り、

野辺「——もし勝ってしまったらどうしよう。

むしろ悩みはそこにあるんじゃないかな」

瞳 「え。（夏樹に）マジなの？」

夏樹「私と同じサイバスロンルールで闘う、

機械の力は一切借りない。その条件で岡は

外骨格のレースを希望したんですよね？」

野辺「うん。それも往復して走ると言ってる。

40×2の80mだから、まあ常日頃の彼なら

大したハンディじゃないだろうけどね」

瞳 「無茶よ無茶。岡さんも大人げない」

夏樹「普通にやったらまず無理だろうけど、

博のやつに考えあるみたいだし」

野辺「あれで結構勝負師だからな、ヒロ君は。

猪突猛進型アスリートの扱いもうまい」

瞳 「どうしてそこでこっち見るかなあ」

と、ダンスフロアで叫び声が上がる。

酔客同士が小競り合っている様子。

野辺「またか。手荒な客も増えてね、この頃」

「ちよつと失礼」離れていく野辺。  
瞳 残された瞳が勝手にビールを注ぎ足し、  
夏樹 「そんなに面白だったんですか？」  
瞳 「え？」  
夏樹 「亭主。まかり間違つて旦那に勝つたら、  
メンツ潰しちゃうつて。怖いんでしよう」  
瞳 「岡選手つて、先天障害ですよね」  
夏樹 「うん。産まれた時の病気が元で」  
瞳 「夏ちゃんは事故で中途障害。ご主人は  
いわば障害者のプロで、自分はアマチュア  
だつて意識があるんじゃないですか」  
夏樹 「そればかりでもないんですけどね」  
瞳 「初心者だとかプロだからとか、妻とか  
夫とかまだるっこしいのもう止めようぜ。  
人と人だよ、男と女さ、その勝負じゃん。  
夏ちゃんうちで家事とかしなかつた人？」  
夏樹 「したけど、一応」  
瞳 「旦那と買物に行くの。着替えは別々？  
背中流しっこしたり、お休みのキスはする。  
セックスはどうやるの。どっちが上なの？」  
夏樹 「お酒がすぎると毒よ、瞳ちゃん」  
瞳 グラスに伸びた夏樹の手を払つて、  
瞳 「酔つてない。だつて大事なことだもん。  
健全者で消防士の彼氏がいるけど抱かれる  
よりも抱きたいから私が上に乗るの。体の  
強さは敵わなくても彼とはイーブンだし、  
お互い敬意を持つて過ごしたいから」  
夏樹 「……敬意、か」  
瞳 麻痺した足を確かめるように触る夏樹。  
瞳 「相手をやっつけたいからレースするん  
じゃない。勝負を終えて白黒つけて、また  
二人で認め合うために走るんだよ。結果が  
どうでも試合した後で、夏ちゃんもつと  
強くなるつてあたしは信じてるから」  
夏樹 「ありがと。頑張つてみるわ」  
瞳 戻ってくる野辺を横目に見ながら、  
夏樹 「私もね、夜はいつでも上位だったよ。  
大ちゃんの好きなようにはさせなかつた」  
瞳 「え」

夏樹「ベッドの中の岡選手。——聞きたい？」

悪戯めかして耳打ちする夏樹。

瞳は隠しきれず口を綻ばせて、

瞳「（含み笑いの）……マジで？」

体を小突きあい、改めて乾杯する二人を  
野辺がきよとんとした顔で見る。

○ 多業種交流研究会（朝）

貸ホールで講演が行われている。

男「……即ちサイバスの発展によって、

攻殻機動隊やガンダム世代の僕ら研究者が  
夢に見た義体化、身体のサイバー化という  
未来が商業ベースに乗ったわけです。国内  
万の障害者を対象としたプロフィットを  
マクロの視野でいかに上げていくか——」  
実業家然とした若者が語るのを、末席で  
気もそぞろのまま聞き流す博。

手元のスマホに時おり目を落とす。

同僚「ああ。昼からだもんな、世紀の一戦」

ヒューマスロン特設ページが表示された  
博の携帯に「岡大輔（城都製作所）vs  
南部夏樹（チーム機人）13時」とある。

○ 市営体育館・表

釣りを貰わず急ぎタクシーを降りた博、

正面口でコンビの記者とすれ違う。

忌々しげに首を振って去る二人組。

「……」

開いた扉の内側で観戦中の野辺に、  
「遅れました。何かありましたか」

野辺「「こんな試合が記事になるか。70年代

猪木アリ戦以来、世紀の凡戦だ」ってさ」

義手を持ち上げ中の競技場を示す。

野辺「——観る目がないなと思うけどねえ」

○ 同・電動外骨格レース場

パワードスーツが二機、先を争って走る。

夏樹と岡。同じスーツと杖を操りながら、  
両者の差はもう歴然と開いている。

—— 30 m 地点で夏樹の圧勝だ。  
堅実に歩む夏樹に対し、折れそうな膝を支えることすら難儀する様子の岡。坂でつまずき義足側から転倒する。

× × ×  
場内の観客から一斉にブーイング。

異様なレース展開を見つめる瞳、江場。

瞳 「岡さんのスーツ。電源を……」

博 「落としてある。4、50 kg<sup>※</sup>の鉄の塊だ。

着ければ足の可動域も大きく制限されて、まともに歩くことさえ難しいだろう」

瞳 「逆に縛りがきつすぎじゃないですか。お客は何が起きてるか分かんないし」

博 「険しい表情を観客席に向ける江場。

借りずに闘う。動かないスーツでも、その重みから逃げずに背負って走りたいと——

瞳 「彼の方から提示してきたハンデイだ」

野辺 「健足側の膝を使って起き上がる岡。

野辺 「“マイナスから0へ”だよ、瞳ちゃん。

プラスを重ねることだけが強さじゃない。勝った負けたで測れない価値もあるんだ」

× × ×  
ギョラリーの前、岡は再び走り始める。

驚異的なバランス感覚で飛び石を渡り、不屈の意志で追い上げを見せる岡。

脅威を感じて幾度も振り返る夏樹。

野辺の声「きつと岡君にだって分かってる。極度のマイナスに身を置いて闘うことが、

どれだけ自分を強くするのか——」  
だが猛追もむなしく40 mのレースを先に制したのは夏樹。遅れてゴールする岡。

膝に手を突き激しく息を吐く夏樹。  
岡は天を仰いでくるりと踵を返す。

「復路なんか走るな」「もう止めて」と  
野次や悲鳴が入り交じるレース場。

義足の膝継手が軋んで悲鳴をあげる。  
制止しようと思わず伸ばした夏樹の腕を

近づいた博がやんわり押し留める。

博 「彼に触るな。見送るんだ、しっかりと」  
夏樹 「……」

首で振り向いた岡がにやりと笑う。  
胸を張って完走へと踏み出した彼の背に  
控え目な「頑張れ」の声が掛かる。  
岡、オカと名を呼ぶコールも沸き起こり、  
野次と声援が半々に交差する場内。

野辺の声「わけを知らない観客の胸にだって、  
そんな強さのいくらかは届くはずさ」  
差し込む陽光に照らされた夫の背中を、  
夏樹は肩を上下させながら見送る。

○ 野辺のバー・ダンスフロア（夜）

夏樹と岡がワルツのリズムで踊る。

夏樹 「試合のことはもういいでしょ？」

岡 「復路は相当タイムを縮めたんだ。もう  
一度やればナツにも勝つ自信がある」

夏樹 「もう二度とやらない。世界パラ陸上も  
近いんだから戻んなさいよ、本業に」

岡 「パラには勝つしサイバロンも勝つ。  
リターンマッチを組んで貰いたいな」

夏樹 「もう何とかして、この運動バカ——」  
車椅子の肘に置いたワインを飲み干し、

さっさとフロアを降りていく夏樹。

野辺 「偲ばれるねえ、夫婦生活の気苦労が」  
瞳 「逆にお似合いの気もしますけど」

見送る二人が密かな苦笑を交わす。

○ 同・カウンター席（夜）

卓に突っ伏して寝息を立てる夏樹。

空の一升瓶を胸に抱え込んでいる。

隣でガウンを掛けてやる岡、博に、

岡 「スポーツ選手が潰れちゃ世話ないな。  
酒やら煙草は控えるよう言っ下さい」

博 「……はい」

岡 「辞めさせるつもりじゃないでしょう、  
ヒューマスロン。ナツにはどうも向いてた

らしい。スポーツじゃないと無礼を言った  
こと、この場を借りてお詫び致します」

博 「いえ。無礼はお互い様でしたから」

岡 「100%勝つつもりでしたよ。こんなこと、あなたに言うまでもないとは思うけど」

博 「……」

岡 「障害者スポーツに限らず、勝負事にはあれこれ邪推を巡らす奴がいるもんでね。相手が女房だから、重度障害だから勝ちを譲った。ともすれば俺の記者会見から全て、脚本ありきの出来レースじゃねえか……」

博 「おっしゃることは分かりますよ」

岡 「そちらの挑発に本気でムカついたら、勝算があればこそハンデイも引き受けたんです。ナツの走りが純粹に上だった」

博 「正直、ここまでやるとは思わなかった。

予選の時より更に力を付けています」

岡 「強くなった。機人たちのお陰で」

博 「夏樹はずっと強い女性でしたよ。……

あなたが見ようとしなかっただけで」

岡 「……」

博 「夏樹に虐められた頃、あいつを怖いと思つたことはなかったんです。今は彼女の瞳からして怖い。この世界と自分を襲った、大きな悲劇をそこに焼き付けてきた——」

○ 釜石の復興現場（イメージ）

黒い瓦礫と青い海を見つめる夏樹。

博 の声「それこそ鳥の目から虫の視点まで、あらゆる位置からものを見通すような……  
岡 さんも覚えがあるんじゃないですか」

○ バー・カウンター席（夜）

軽くうなづく岡は夏樹の顔を眺め、

岡 「……心のどっかで俺は彼女に勝てない、

そう考えてた節はあります。何せ陸上バカだしね、口でも頭の回転も敵わない。足の動かないナツのやること逐一縛って、檻の虎みたく家庭に閉じ込めてた。障害の重い彼女へのパワハラだったかもしれないね」

博 「でも、彼女は自分で檻を破った」

岡 「俺を倒した。勝負事のスタートラインにさえ立とうとしなかったナツが、紛れも

ないスポーツの舞台で成し遂げたことだ。  
こんな嬉しきことではない、と同時に……  
何より悔しい負けなんです、俺にとつては」  
博 「まんまと足を掬われたんですね」  
岡 「(笑)ほんた。今夜はこれで帰ります、  
義足のソケットがもうガタガタでね」  
ブーツを着けた岡が立ち上がる。  
岡 「20年のオリンピックとサイバロンが  
同時開催されるかもって話を聞いてます。  
夏樹も俺のチャレンジもまだこれからだ。  
東京で会おうと伝えてくれませんか」  
うなづく博が岡と手を握るのを、夏樹は  
薄目を開いてじつと見つめている。

○ 地下鉄駅(夜)

やや右足を庇って階段を下りる岡。  
博の声「タヌキ寝入りは趣味が良くないぞ」

○ バー・カウンター席(夜)

卓に寝たままの夏樹、床を掃く博。  
夏樹「男一人で汗っ臭い話ばっかしてるから。  
起きるに起きれなくなっちゃったの」  
博 「大ちゃんに初勝利、おめでとう」  
夏樹 「茶化されるなら走んなきゃよかった」  
博 「悪い。……超えたとと思うか、壁を？」  
夏樹 「ん。初めて見たかも——大輔の背中」  
博 「え？」

○ 駅のホーム(夜)

「パラ陸上の岡さんですよ」と手帳を  
差し出しサインを求める女性二人。  
岡は苦笑しながら快くペンを執る。  
夏樹の声「車椅子だと視線が低いじゃない。  
今日はスーツで、立って見られたから……」  
そこまで肩幅広くないんだ、とか思ってた」  
その岡の背後で、唐突に響く怒声。  
男の声「この糞ガキが。俺の金を返せ」  
泥酔したサラリーマンと思しき中年男が  
学生の胸倉を掴み揺さぶっている。  
義足を引きずるように駆け出す岡。

夏樹の声「苦手意識はもう無くなつたかな」

○ バー・カウンター席（夜）

モップを絞って博に手渡す夏樹。

博 「同居に戻るつもりはないのか」

夏樹 「あの調子でしょ。まだまだ陸上が恋人

って感じ……だけど今は私も、肩を並べて

大輔を近くに感じられるから。夫婦よりも、

まず戦友として傍にいらればさ……」

○ 駅のホーム（夜）

男 「ぶつかると振りして財布を掏りやがった。

若造が、必ず牢屋にぶち込んでやる」

岡 「落ち着けて。彼の話聞いて！」

「やってみせよ」細い声で訴える学生と

揉み合う男の間で突き倒される岡。

義足が外れてホームを滑り転がる。

男、ぎよつと怯むが虚勢を張って、

男 「何だ、カタワか。出しゃばりやがって」

岡 「立派なスーツ着て、こんな子供に因縁

付けて。自分を恥だと思わないのか」

男 「うるせえ！ たかが障害者風情がよ。

人様に説教なんか垂れてんじゃねえ」

力を込めて岡の上半身を蹴り倒す男。

煽りを食った学生が線路に落ちる。

「落ちたぞ」「駅員呼んで！」と周囲の

喧騒に恐れをなした中年男が逃走。

線路に横たわる学生。頭を打ち、朦朧と

した様子の彼に手を伸ばす岡だが、

岡 「片足じゃ無理だ。手を貸して、誰か！」

周囲の制服OLも年配のビジネスマンも

二の足を踏んで線路に近づけない。

折悪しく鳴り響く到着アナウンス。

業を煮やした岡が線路に飛び込む……

○ 暗転――

到着列車のブレイキ音が響き渡る。

○ 市警察署・刑事課（夜）

閑散とした室内に男の啜り泣く声。

衝立で仕切られた隅に夏樹と刑事。

刑事「何よりもご主人との対面を優先させて頂くべきとは思いますが、お体の状態があまりに……。葬儀社に修復を頼みたいが、なにぶん遅い時間帯のものでね——」

放心した顔で刑事の話を聞く夏樹。

傍の机に布で丁寧に包まれた義足。

金属疲労で継手がひどく傷んでいる。

啜り泣きの主——線路から救い出された学生が、一層大きな声を上げて泣く。

目を腫らした瞳が「うるさいっ」と一喝。

瞳「男のくせにグズグズメソメソ。本当に泣きたい人はあんたなんかじゃない」

野辺「瞳ちゃん」

諫める野辺の右手に顔を埋めて泣く瞳。

刑事「列車が進入する際の際まで、ご主人は彼を救おうと闘われたそうですね。片足で50kgを超える人の体を背負い、持ち上げて——考えられない馬力と、勇気です」

声「英雄だったと思います。本当に……」

奥の席から声を上げたのは岡にサインを求めていたうち一方の女性である。

駅に居合わせた目撃者が集まっており、「男の人が蹴落としたんです」「事故で済ましちやダメだよこれは。殺人だって」

「絶対に許せない」と口々に騒ぐ。

刑事「むろん逃げた男の行く先は刑事事件として捜査を開始しています。所轄刑事課の名誉に懸けても容疑者の逮捕を」

夏樹「いえ。捜査は……結構です」

怪訝な顔の刑事に車椅子の背を向けて、夏樹「何したの。降りてった時——大輔が」

サインの女「え……？」

夏樹「身障者だって分かってたはずでしょう。片足の彼が轆かれるまであんたら健全者が一体何をしたって言うの。何ができたの？」

博「止せ。……夏樹」

夏樹「誰一人降りなかった。非常ボタンさえ押さなかった。彼がアスリートだから？」

スーパーマンみたたく救出成功して万歳つてどっかで甘く考えてたから？ ふざけんな。何が英雄よ。人殺し——あんたたちだつて人殺しの共犯だ。健全者が寄つてたかつて、一人の障害者を見殺しにしたんだ！」

博 「夏樹！」

車椅子から身を投げ出して倒れる夏樹。岡の遺した義足を掴んで、抱きしめる。

夏樹「戻してよ。元あつたように全部戻して。

大ちゃんを返してよお、ここに……」

悲痛な叫びがこだまする刑事部屋。

皆が凍りついたように動けず……

○ 大学・人機共同研究科（朝）

寮の入口へと早足に行く博。

「昨日のメトロの人身事故——」と噂を囁き合う学生とすれ違い顔が曇る。

エントランスから出る野辺と行き合い、

博 「お疲れ様です」

野辺「僕は5時から。それまでは瞳ちゃんが小さくうなずき合鍵を受け取る博。」

○ 大学寮・夏樹の部屋

ベッドに座って岡の写真を眺める夏樹。

コルクボードの記事は剥がされ、一枚の古びたエコ写真が貼られてある。

簡素な祭壇に安置された岡の義足。

博がノック三回、「入るぞ。いいな」と

返事を待たず鍵を開けて入室する。

夏樹「何なのもう、入れ代わり立ち代わり」

夏樹は乾いた笑い顔で迎える。

ベッド正面にあぐらをかく博。

夏樹「朝ゴハン野辺さんの手作り、夜中は

非常ベル持った瞳ちゃん。江場さんだつて

2時間くらいそこで座つててくれて」

博 「皆、お前のことが心配なんだよ」

夏樹「——監視を付ける必要なんてないよ。自分で死んだりするつもりないから」

博 「……」

夏樹「半身マヒで多いのは首吊り。練炭とか

毒は入手が面倒だしね。飛び降りるは周りが  
気づいて止められるから無理、非常階段で  
飛ぼうとした知り合いの受け売りだけど」

博 「夏樹」

夏樹 「絶対に死んでなんかやらない。私……  
私たちは、たかが障害者」じゃないんだ」

夏樹は取り憑かれたように話す。

夏樹 「そう言った男に大ちゃんは殺された。  
パラリンピック銅メダルなんて世間一般に  
どういう価値も権威も持たないってこと。

勝たなきゃダメだ。ずっと勝ち続けなきゃ、  
障害者の価値なんて永遠に0のままだよ」

博 「違うよ。断じて、それは違う」

夏樹 「0じゃダメなんだ。勝つ。勝ちたい。

勝たなきゃ。どこまで勝てばいい？——

サイバスの金のメダルを獲る。本気だよ。  
今よりずっと勝ち星を重ねて……それなら  
きつと大ちゃんの分まで強くなれる」

博は鞆から一組の書面を抜き出し、

博 「テストパイロットの契約は終わりだ」

夏樹 「(首を横に振り)……嫌」

博 「報酬は払う。寮にもしばらく居られる  
ように計らう。今はとにかく心を休める」

夏樹 「何で奪うんだ。夢を見せて——私に！」

雪崩れるように跳び掛かる夏樹。動かぬ  
麻痺肢で馬乗りになるとベッドサイドの  
補助杖で博の首元を押しつける。

弾みで音を立てて倒れる車椅子。

博 「……やれよ。お前に殺されるなら……  
どうせ十四歳で失くしかけた命だ。でもな  
……岡大輔はまだ負けちゃいないぞ」

体を震わせ、祭壇の義足を振り返る夏樹。

博 「岡は死んだ。……昨日、あの駅にいた  
全ての健全者の代わりに死んで……そして  
勝ったんだ。どんな悪条件でも……誰が  
相手でも負けない強さを証明した。お前が  
手を汚せば……彼の勝利は台無しになる」

見る間にくしゃりと夏樹の顔が歪む。

杖で幾度もベッドを叩き、嗚咽する。

車椅子の両輪が力なく回り続けて——。

床に寝そべる夏樹と博。 × ×

夏樹「旦那はね。祝福されずに生まれてきた」  
窓からの逆光にエコー写真をかざす。

” 1985/4/15.Oka Harumi ” と記載がある。

夏樹「いわゆる出生前診断。超音波検査も  
当時は今ほど精度がなかったけど、胎児の  
段階から大輔の足に先天異常があることは  
明らかだったの。義父上は大変な苦勞の末、  
脳性マヒのご兄弟を看取ったばかりでね。  
お義母様を抱きしめて言ったらしいわ——  
やり直そう。不幸な命を作りたくないって」

博「……つまり中絶を勧めたわけか」

夏樹「お義母様は泣いて逆らった。この子を  
殺す社会に生きていたくないってそれこそ  
自殺未遂まで起こしたって話……最後には  
お義父様も妻に押し切られる形で、大輔が  
この世に生を享けることになった」

博「家族の中はぎくしゃくしたろうな」

夏樹「それでも……や、それだからだろうね、  
大輔は極端なお父ちゃん子になった。慣れ  
ない義足でどこへ行くにも付いて歩いて、  
わざと転んで気を引いたりもした……」  
うつ伏せに這って祭壇に近づく夏樹。

室内用とバネ式、二本の義足が並ぶ。

夏樹「九歳で競技を始めた。地元の記録会で  
健全者を抑えて一着になった時……あれは  
息子です。僕の子なんです、普段は寡黙な  
お義父様がそう喋って回ったそうよ」

夏樹「陸上だけが手がかりだった。生まれた  
ことは間違いじゃない。足の揃った健全者  
より価値あることを俺はできるんだって、  
父に証明し続けるために」

博「親父さんは、今……」

夏樹「ご存命だけど、脳梗塞で車椅子生活。  
たった今、息子のことはもう分からない」

○ とある老人ホーム——

談話室のテレビを盛んに指差し、笑みを

浮かべる車椅子上の岡信俊（75）。  
周りの入居者が痛ましげに見る。  
信俊が指すのは息子の遺影——岡大輔の  
早すぎる死を悼むニュース映像である。  
夏樹の声「それでも大輔は面会に通ってた。  
月一度、五輪の時も結婚式の後でも」

○ 人機共同研究科・運用試験場  
パワードスーツが収納庫で眠っている。  
その腰部と足にそっと触れる夏樹。

夏樹「義父上に捧げた競技人生だった。私も、  
大ちゃんのために走りたかったのに……」

博「……諦めるにはまだ早いだろう」

夏樹「何言ってるの。さっきあんたが」

博「テスト期間は終わりと言っただけだ。  
正規パイロットとしてお前を登用したい。  
心を休めて、チーム機人にまた戻ってこい」  
改めて書面を渡す。夏樹の選手登録書と、  
ヒューマスロン本戦の参加同意書——。

夏樹「……」

博「早とちりしやがって。バカ力め」

博はにやりと首を擦ってみせる。

○ 海沿いを貸切バスが走る（数週間後・夕）  
車中にチーム機人の一同。

博「本戦会場は茨城、大洗。六年前の震災  
では津波の少なからぬ被害を受けている。  
国際スポーツで現地を盛り上げたいという  
我々たつての望みを聞いて頂き、運動場を  
お借りすることになった次第です」

瞳「拍手が起こる。瞳が手を挙げて、  
「本戦の日程と、対戦形式は？」」

博「開閉会式を入れて六日間。予選と違い、  
全5チームによる総当たり戦を行う。最も  
勝ち星の多いチームが優勝に輝く」

代わって野辺が左手を挙げる。

野辺「本家サイバスロンは全6種目だよね？  
ほかに車椅子レースと義足レースがある。  
本戦でこれらは免除されるのかい」

博 「いいえ。6種目を闘い、出場できない種目については失格になる。強豪チームは多くが6種目にフルエントリーしてます」  
瞳 「何それ、勝負にならないじゃん」  
博 「助っ人を呼んである。マリンホテルにそろそろ到着してるはずだけど……」  
博 はちらりと夏樹に一瞥をくれる。  
夏樹 「……？」

○ ホテルラウンジ（夜）

ロビーのカフェで寛ぐチーム機人。

加藤（25）と車椅子の河野（38）が来る。

加藤 「風呂に入ってる。遅くなりました」

夏樹 「夏場に厚手のブーツを履いた加藤に、

加藤 「もしかして……パラ陸上の」

加藤 「加藤です。大輔さんとは同じチームで。

今度のことは本当に悔しいし、無念でした

……あ、強化義足レースに登録してます

と左の裾をめぐる。本番用の電動義足。

河野 「同じく河野です。僕は車椅子レースに。

パラ代表としてベストを尽くします」

博 「お二人ともそれぞれ100m走と、車椅子

マラソンで申し分ない実績を持つてる」

河野 「岡さんほどとは行きませんが」

加藤 「同じ義足で走る身として憧れでした。

夏樹さんとの試合を見て、俺もこの舞台で

闘えれば……ご主人の身代わりなんて

柄じゃないけど、一所懸命走りますんで」

差し出された手を夏樹は素気なく握り、

夏樹 「……どうも」

野辺、瞳、江場とタッチを交わす加藤ら。

フロントに着く金髪碧眼の集団。

こちらと同じ「機人」の一隊である。

見慣れぬ義手や補助杖、最新鋭の車椅子。

野辺 「——優勝候補がお着きになったかな」

瞳 「なんか見るからオーラありますけど、

予選じゃ姿を見ませんでしたよね」

博 「彼らはシードだ。ゲスト枠で招聘した

スイス連邦工業大学チーム。今大会で唯一

サイバスロンでの入賞経験もある、いわば



○ 同・電動義足コース  
先に階段を上り、歩速を緩める加藤。  
わずかな隙を見逃さず、相手選手が階段  
下から起死回生のダイブを試みる。  
転がりながらゴールラインを越す。  
お祭り騒ぎに沸く韓国ベンチ……  
呆然とする加藤の傍で、手近のパネルに  
ドリンクボトルを叩きつける夏樹。  
掲示板が変化し【KOR 3 - 2 JPN】。

○ 同・電動車椅子コース  
ゴール手前で急停止する相手選手。  
砂利を噛んだタイヤが空回り……  
安定の走りで逆転勝利の河野、拳を高く  
突き上げ歓喜のウイニング・ラン。  
【KOR 3 - 3 JPN 試合終了】——。

○ マリンホテル・レストラン（夜）  
夕食の席、慥然と肉を切り分ける夏樹。  
江場を除いた六人が顔を合わせる。  
夏樹「引き分けて御の字だなんて思えない。  
9割方まで勝ってた試合なんですよ」  
野辺「あと1割が踏ん張れなかったね」  
夏樹「野辺さんだって逆転負けだもん。信じ  
られませんが、サッカーボールお手玉して  
10mのリード帳消しにするなんて」  
詫びるように右手を上げる野辺。  
博「義手で何かを掴んだこともないのにな、  
ひとの競技に口出すんじゃないよ」  
夏樹「勿体ないって言ってるだけ。加藤君も  
野辺さんも、地力じゃ下の相手に負けてる。  
どっかに緩みがあるんだと思うの」  
加藤「別に油断はしてないですけど」  
夏樹「岡大輔ならあんな負け方はしないよ」  
瞳「ちよつと夏ちゃん……」  
夏樹「パワードスーツを着た私だってそう。  
今日は一度もリードされなかったし」  
博「夏樹はいつから総監督になったんだ。  
たまたま1勝挙げたぐらいでな——」  
夏樹「たまたま？」

テーブルを叩く。危うく揺れる水。

河野「目先の勝ちが全てじゃないでしょう。試合のデータを通じて、機械による障害者福祉の課題と改善点を探していく。それもヒューマンスロンの目的だって聞いてます」

瞳「(博に) そうなの？」

博「負け試合のパフォーマンスからだって得るものは十二分にある。国内外の優秀な大学や福祉ベンチャーと技術交流を図り、切磋琢磨して障害者の暮らしに役立てる」

夏樹「切磋琢磨ね……」

博「何かおかしいことを言ったか？」

夏樹「いや。考えたらさ、あんたにとっちゃ勝ちも負けでも大して違いなんだって。チーム機人が勝つ必要はないのよね」

野辺「もういい。僕らが不甲斐なかったんだ」

夏樹「選手を自慢のロボットみたく走らせて、技術と顔を海外企業に売る。科学者として自分にヘッドハントのお声でも掛かったら一丁上がりの万々歳ってね。違う？」

博「……」

夏樹「野心を持つのは結構だけど、障害者をコマに使うのは止めてくれないかな」

博「——もう一度言ってみろ、夏樹」

夏樹「言うかどうか。殴って黙らせるの？」  
加藤「ちよつと俺もう失礼しますよ。明日に備えて寝ときたいし、負けるたんびこんな揉めるようならやり切れないからさ」

席を立つ加藤。河野も黙って後に続く。

夏樹はロッカールームの鍵を取り、  
夏樹「私も行く。明日に備えて……外骨格の借出申請はもう出してあるから」

と、漕ぎ出す車椅子の肘を押さえる瞳。

夏樹「……放して」

瞳「機人なんて呼ぶからかっこいいけど、夏ちゃんにはロボットじゃない。人間だよ。人間はね、使いすぎると壊れるんだ」

夏樹の手を取り自分の腿を触らせる。

目を閉じ骨ばったその感触を確かめ、

夏樹「知ってる」

○ 同・トレーニングルーム（夜）

パワードスーツの夏樹が屈伸を続ける。本番と同じソファ、ジョイスティックで体を支えて1度、3度、5度……

関節が軋む。噴き出す汗。悲鳴を奥歯で噛み殺す。重量挙げのように体が震える。口にはマウスピース。両手に5kgの砂袋。7度の屈伸を終え、歩き出す夏樹。

瞳 「壊れちゃうよ、こんなの続けたら……あんなにスポーツ嫌いだっただのに」

車椅子の瞳もダンベルを上下させるが、あくまで流した軽めの調整である。義手を180度回して動作を確かめる野辺。

野辺 「あえて自分を追い込んで。体を虐めぬくことで、却って心が引き裂けないように……ひとから嫌われようとするのは孤独の中に身を置いたためだ。アスリートとして、おそらく彼女が選んだ道なんだろう」

博 瞳 「……でも、このままじゃ」  
「今のあいつは岡になりたいと思ってる。ストイックな姿勢まで旦那そのままに……」

気の済むようにやらせるしかないさ」

博 瞳 「……」  
「出ましょう。……30分で消灯だ」  
後ろ髪を引かれつつ去る瞳、野辺、博。

× 広い室内に一人、膝を突いた夏樹。  
× 外骨格から逃げるように脱ぎ捨てると、  
× 片隅に停めた車椅子へ這っていく。

ヒッ、ヒッと泣くような音が喉から漏れ、暗示のように呟きを繰り返す。

夏樹 「勝つ、かつ、勝って、勝たなきゃ——。  
勝ちたい、かちだいいい……ああアツ……」

× 訓練室の外では灯が絞られている。  
× 暗い廊下で電動車椅子に乗った江場が、  
× 苦しむ夏樹をただ見つめている……

○ 本戦会場・電動外骨格コース



瞳の声「どんなに強くて、逞しく見えたって、爆弾抱えてるみたいなものなんだよ……」  
汗が目を塞ぎ、涙が鼻筋を流れる。  
顔中どろどろの夏樹……だが下り階段で立往生する相手を振り切り、ゴールイン。ラインを越えて膝を折り、号泣する姿はとても勝者のそれとは思えず――。

○ 同・医務室（夕）

左腕に包帯を巻いた夏樹が寝台に。  
白衣の博がカルテを持って近づく。

博 「軽い腱鞘炎だ。腰回りの筋肉も疲労が著しい。オーバークの無理が祟ったな」

夏樹 「……医者みたいじゃん、まるで」

博 「上ばかり見てると足を掬われる……」

夏樹 「……」  
「つかお前が、旦那に言ったことだろうが」

博 「明日は休め。新メンバー二人の調子も上がって、夏樹の穴は充分に埋められる」

夏樹 「試合結果『5・1』を指でなぞり、」

博 「……」  
「……」

夏樹 「咎めるような視線に夏樹は書面を叩く。和尚は2戦2敗、どっちも惨敗だよ」

博 「スランプは誰にでもある。脳波で操るBCIは特にデリケートで、本人や周りの精神状態にも大きく影響を受ける。誰かがチームの和を乱してる今なら、なおさらだ」

夏樹 「私のせいだって言いたいわけ？」

博 「長い目で見ると言ってるんだよ」  
「間仕切りのカーテンを強い風が揺らす。夏樹「障害の種類も程度も人それぞれだし、六人いれば六通りの闘い方があると思う。でもBCIはスポーツよりもゲームだよ。あれを実用化して、障害者の暮らしにどう役立てるつもりか私には分からない」

博 「分かってないさ。お前は――」

翻るカーテン。車輪が垣間見える。  
電動車椅子の静かなモーター音……

夏樹「——江場さん」

寂しい笑みを浮かべた江場がいる。

江場「……話がしたい。妻と……娘。二人と」

大きく喉仏を動かし、顎を上向かせて、

一語一語を確かに絞り出していく。

初めて聞く江場の肉声に声もない夏樹。

江場「BCIで……、脳波を、言葉にして。

Eメール、チャットで、意思を……通じる」

博「いいんだ、江場さん」

制止する博の腕を嫌うように、車椅子を

90度回転させて江場は話し続ける。

江場「……進行する、病気が、できることを

……奪っていく……食べること、歌うこと、

喋ることもじきに……負け続きの、人生だ。

誰だって、勝ちたい……。自分の、限界に、

生き方までも決められたくはない……勝ち

たいよ。自分の体、この障害に……明日、

来月、来年、十年後も、……勝ち続けたい。

だから走る、勝つために、ここに……

同じだろう。君たちだって、きつと……？」

博「俺から——彼女には」

きつと伝える、そう博が胸を叩く。

指でパネルを操作し振り返る江場、

江場「肩の、力を、抜けよ。……夏樹ちゃん」

髭面に仙人のような笑みを浮かべ、博に

肩を抱かれて医務室を後にする。

度重なる練習で「杖ダコ」のできた掌を

広げ、握って力を込めていく夏樹。

夏樹「……痛い」

確かめるように呟き、左腕を擦る。

窓の外には夕映えの海が広がっている。

○

本戦会場・電動外骨格コース  
不穏なざわめきに包まれた観客席。

ドア・タスクの前で立ち止まった夏樹は  
取り返せない差を付けられている。

【JPN 4 - O THA】の掲示板表示を眺め、  
前に行くタイ人選手が走り切った瞬間に

座り込んでスーツを脱ぎ始める夏樹。

投げ遣りな態度にブーイングの嵐。

博が近づき係員に両手で×を作る。

博 「棄権はしていい。歩いて戻ってこい。」

動けなかったら肩ぐらい貸してやる」

夏樹 「……ごめん」

博 「何のゴメンだ。無理を承知でレースに

登録したこと。金を払った客の前で醜態を

晒してること。アスリート兼パイロットと

してプロの自覚を欠いたこと。一体どれを

謝りたいのかハッキリさせて、今日は休め」

夏樹 「色々もう纏めて。ごめんなさい」

のろのろ立ち上がる夏樹の背中に、

博 「——皆を駒だなんて思うわけがない。

心中でも何でもしてやるから好きにやれ、

チームの誰にも気兼ねしなくていい」

夏樹 「……」

博 「旦那に恥ずかしい試合だけはするな」

唇を噛む夏樹。隣のコースで大きな歓声。

スイスチームが6対0の完勝——。

○ 同・BCIレース・操作席

ヘッドギアを着けたタイ選手と技術者が

抱き合って健闘を喜び合っている。

傍でがくりと首を垂れている江場。

アバターはゴールにすら辿り付けず……

無念の顔を多量の汗が滑り落ちる。

【JPN 4 - 2 THA 試合終了】。

○ マリンホテル・休憩室（夜）

野辺、加藤、河野、瞳が思い思いに並び、

マッサージチェアで疲れを癒す。

野辺 「三日を終えてスイス全勝、圧倒的だね。

中日を挟んで2位のうちとぶつかる」

タブレットPCを操りヒューマシオンの

ネット記録に目を通して野辺。

河野 「名実ともに決勝戦でことですね」

瞳 「あっちは一つもまだ星を落としてない。

完全優勝だけは阻止したいけど——」

思いつめた様子で通路を来る夏樹。

トレーニング室へ車椅子を進める。  
加藤「根詰めすぎるとまた倒れますよ。……  
パワードスーツはさつき伊能さんが」

そつと加藤のチェアに触れる野辺。  
加藤、肩を竦めて夏樹の細い背を見送る。

○ 同・トレーニングルーム（夜）

夏樹が隅の収納室を見上げる。

テープを巻かれ封印された外骨格。

端正な男文字で『大会終了まで貸出禁止』

『鳥居下に14時』と紙が貼られてある。

夏樹「……」

○ 大洗・鳥居下交差点

海岸通りをきよろきよろ進む夏樹。

大鳥居の下、一台のバンがすつと近づき

夏樹の隣でドアを開く。運転席に博。

「神社を一巡りする。乗ってくれ」

伸びたタラップの先、車内に先客。

スイスチームの女性外骨格パイロット、

車椅子のマヤ（33）が優雅に笑みを作り

穏やかなフランス語で話しかける。

マヤ「マールヤ・マリニャク。マヤ、と呼んで

下さい。日本の名前にもあるそうだから」

状況を掴みかねて夏樹は目を瞬く。

○ 走るバンの車内

窓外を山道の濃緑が飛んですぎる。

背後に通訳。マヤの左側に車椅子を並べ、

いたたまれなく夏樹は体をよじる。

マヤは前を向いて話す（以後全て仏語）。

マヤ「急に呼びついたりしてごめんなさい。

トップを争うチーム同士のパイロットが、

あまり公に話すのもどうかなくて。何かと

想像力の逞しい方々もおられるでしょう」

ころころと笑う。曖昧にうなづく夏樹。

夏樹「でもなんだって神社に——」

マヤ「戦没者の慰霊碑があると伺って、ぜひ

お参りをしたいと思いました。祖国を守り、

民に奉じるスイス国軍の一兵士として」

夏樹「え、軍人……さん？」  
細身の体を夏樹は思わず眺めやる。

○ 神社・忠魂碑

つたない所作で碑に拝礼するマヤ。  
車内で死角になっていた彼女の右首筋に  
波のような火傷の痕を認める夏樹。

夏樹「……」

マヤ「コソボでの軍務で負った傷です」

バツ悪く夏樹は首から視線を外す。

マヤ「敷設された地雷の撤去作業中でした。

爆風に飛ばされて胸椎10番……、あなたと

同じ脊髄を損傷し半身不随になった」

夏樹「展示場であなただけを見かけました」

マヤ「覚えてますとも、ナツキ。津波の復興

工事のさなかで事故に遭われた……ずっと

話してみたかった。ヒロに噂を聞いてから」

離れた広場にバンを停めた博を見やり、

マヤ「私たちは似てる。そう思わない」

男の通訳が駆け寄りマヤの体を支える。

夏樹「思いません」

マヤ「なぜ？」

夏樹「マヤさんみたいに立派な動機じゃない。

国民を守るとか……。被災した親戚がいて、

彼らの校舎を建て直したいと思っただけ。

壊れた建物を元の形に戻す。あの頃の私が

やれることだったらそれだけだったし」

マヤ「今はどう、ナツキ。何ができるの」

夏樹「……何も。壊れた体は戻せませんから。

何も成せずには障害者になって夫と出会って

別れてわけ分かんない機械で競争して……

死なれちゃった。空っぽです、今の私は」

マヤ「……そう」

リムを操り器用に段差を降りるマヤ。

マヤ「帰りたいとは思ったことがない？」

夏樹「——え？」

マヤ「私はね、コソボの原野を今も夢に見る。

灌木と壊れた標識、10万個の地雷が潜んだ

荒地が延々と続く悪夢。この世の地獄を」

○ どこまでも広がる南欧の荒野（イメージ）  
地雷撤去隊員用のヘルメットと防護服を  
着け、遠い地平線を睨んでいるマヤ。  
マヤの声「（字幕）暑い夏でした。俺の裏に  
ヴェイジョンが焼きついて離れない……私の  
原風景。障害者として歩み始めた、0地点」  
夏樹の声「ゼロ……？」

○ 大洗海岸・浜辺（夕）

波が砕ける岩場に小さな鳥居が見える。  
夏樹の背を博、マヤを男性通訳が押す。  
マヤ「想い出すのも辛い場所だけど、いつか  
再びあの地に帰りたいとも願っています。  
もう一度この足で、大地に逆らって歩き、  
一つでも多くの兵器をなくすため働く……  
大それた私の夢に、ヒロをはじめ出会った  
科学者たちが確かな道をつけてくれた」

夏樹「それが、強化外骨格……」

博「地雷処理のパワードスーツを造るのに  
あと何年、何十年が掛かるとも知れない。  
できたところで半身麻痺の彼女が乗り込む  
必然性はないって、事あるごとに説得した  
……マヤが傷ついて夢を奪われる姿なんて  
二度とは見たくなかったから」

潮風に乗った葉がマヤの額に張り付き、  
博がハンドタオルを取り出して拭う。

優しい手つきに何かを感じる夏樹。

夏樹「理屈や必然で片付くような気持ちなら、  
こんな体を押しして闘ったりしない。私にも  
あるよ。……想い出した、私の原点」

マヤ「……」

夏樹「ありました。私も、帰りたい場所が」

水平線を夕陽が朱に染めている。

釜石の海が刹那、甦り、土砂に飲まれる  
夏樹の姿がフラッシュバックする――。

夏樹「たとえ人生を何度やり直して、いつも  
同じ結果が待っているとしたりして、私はあの  
壊れた校舎にきつと帰って行く……だつて  
負けたきりだもん。あの日の負けをずっと

引きずってる……私の0はあそこに置いたままだ。——勝ちたいんです、昔の自分に。健全者だった私をもう一度乗り越えたい」  
夏樹の瞳に再び強い闘志が宿る。  
マヤ「やっぱり似てると思うんだけどなあ」  
博「ああ。負けず嫌いなどころなんかね」  
仏語で言い交し、笑い合う二人。

○ マリンホテル・ラウンジ（夜）

部屋へ戻るマヤと別れる夏樹。

マヤ「明日を楽しみにね、ナツキ」

夏樹「負けん気だったら負けませんから」

マヤ「エキサイティングな試合をしましょう」

ボクサーのように拳をぶつけ、思いの外強い力で夏樹を抱擁するマヤ。

戸惑いながら体を預ける夏樹。

マヤ「——話せてよかった。ヒロをよろしく。humaniteを忘れないでと、彼に伝えて」

夏樹「え……」

体を離して通訳共々、去っていく。

○ 同・カフェ（夜）

塔のようなパフェに食いつく夏樹、博。

夏樹「……すごい人だね、彼女。きれいで、賢くて、強い……そんな強さをしなやかに自分のうちに仕舞っておける人——」

博「……そうだな」

夏樹「好きだったんでしよう？」

博「当てずっぽうでものを言うな」

夏樹「見当違いじゃないと思うけど」

博「今でも好きだよ。進行形だね」

夏樹「は、ノロケか。そうこなくっちゃ」

博「……健全者とか障害者なんて関係なく、

出会った中で誰よりタフな女性だ。周りが

立ち竦むような壁を軽々、超えていく……

俺はいつでも黙って見上げるだけ」

夏樹「“残酷な奇跡”は、マヤだったんだね」

博「ん？」

夏樹「障害者でも胸を張って生きる人がいる。パラリンピアンのだねが私の気持ち、

半分までは分かるって。言ったでしよう」

博 「ああ……」

夏樹 「ユマニテを大切に、って。あんたに」

博 「マヤが？」

夏樹、ストローに首を伸ばしてうなずく。

博は黙ってメロンを口に運び……

博 「パワードスーツを100体売ってくれって、

英語の電話が掛かってきたことあってさ」

夏樹 「え？」

博 「何に使ったって訊くとすぐに切れた。

悪戯だって笑ってたけど、のちのちマヤと

同じに兵役で腕を失くした軍人と話して、

驚いた……真顔で俺に尋ねるんだ。義手の

代わりにガンを着けることは可能かって」

夏樹 「ガンって、銃ってこと……」

博 「自分の馬鹿さ加減を呪った。サイバー

技術は容易に軍事目的に利用される。俺が

造った外骨格が傷ついたマヤを戦地に送る

……俺の技術で彼女が人を殺める。そんな

可能性を考えたこともなかったんだ」

○ 大学・人機共同研究科・体育棟（回想）

現在よりも旧式の外骨格を着て訓練中の

マヤを、息せき切った博が訪ねる。

博 の声「よく分からない気持ちのまま彼女に

頭を下げた。謝って……パワードスーツの

研究を続ける自信がもうないと伝えると」

身振りを交えて話す博にマヤが近づき、

スーツを着たまま強く抱きしめる。

マヤ「冷たい。硬い。温かい。どれが一番？」

博 「…… chaud（温かい）」

マヤ「その体温が私の *humanite* —— 人が人で

あり続けたいと願う気持ちの証明よ。今、

あなたが触れる私だけを覚えていて。殺す

ための機械でも哀れな障害者でもない……

人間が真ん中にあることを忘れなければ、

あなたも私も、決して道を誤ることはない」

○ マリンホテル・トレーニングルーム（夜）  
強化外骨格の封印を解き『貸出禁止』の

紙を胴体から一気に引き剥がす博。

「humante」のロゴが現れる……

博 「真ん中入って闘うのが人間なら、造る技術者だって人間だ。俺にも意地がある。

この六年、無駄じゃなかったと証明したい」

夏樹 「そんなの……私だって」

博 「ここまで来たんだ。勝とうぜ、明日は」

うなずく夏樹はスーツの足に触れ、

夏樹 「朝一番で、スーツ、借りていい」

「？」と博が怪訝な顔で見る。

○ ヒューマスロン本戦会場・表（朝）

道を来る野辺、瞳、江場、加藤、河野。

河野 「カメラ倍くらい増えてないですか？」

野辺 「事実上の決勝。大一番だからね」

報道陣と観客を縫って進むと会場入口で

外骨格を着た夏樹が、片膝を突いている。

瞳 「ちよっと何やってんの、夏ちゃん！」

夏樹 「土下座はしんどいからこれで許して。

勝手な走りで、皆にずっと迷惑掛けたから」

瞳 「スーツ着てまでこんなものしないで」

博 「全くだ。最新技術が泣いてるよ」

隣の博が苦笑し夏樹を引き起こす。

夏樹 「チームの勝ちちは私の勝ちだと思ってた。

ごめんなさい。自分一人で空回りして……

人の勝利を喜ぶことができなかった」

俯く夏樹に寄り添うモニター音、江場。

唇の動きで「——ドンマイ」と伝える。

夏樹 「江場さん……」

加藤 「……反省会にはまだ早すぎるでしょ」

夏樹と博の間に入り肩を組む加藤。

野辺も察して義手で博の腕を取る。

三基の車椅子が並び円陣を形作る。

夏樹 「この一戦に全て懸ける。3・2・1」

七人の輪がぐつと狭まり、吼える。

一同 「——ゴール・フリークス、Go!!」

オオッと気合の余韻が尾を引いて……

T 「本戦最終日・第四試合」

○ 同・体育館・電動義足&車椅子コース

ホームの日本人観客から熱い応援。  
夏樹も必死で声を送るが、加藤の3歩を  
スイスの選手は2歩で超えていく。  
河野が苦しむ砂利道を、フローリングを  
滑るかのよう楽々と走る相手選手――  
キヤタピラ付きの新型車椅子である。  
ベンチエリアで博が唇を噛み、  
博 「二人に全くミスはない。サイバスロン  
の怖いところ……マシンの性能と、それを  
引き出す練習時間が絶対的に不足してる」  
夏樹 「頑張れッ。二人とも、出し切ってる」  
夏樹は車椅子から身を乗り出して叫ぶ。

× × ×  
電光掲示板は【SU12 - 0 JPN】。

ハイタッチを交わすスイスベンチを背に  
肩を落として加藤と河野が戻る。

夏樹 「加藤君、河野さん。おめでとう」

夏樹 「顔を見合わす二人に試合記録を見せ、

パラ陸上でも記録を塗り替えて下さい」  
間を置いてから破顔する加藤、河野。  
ハグを交わして健闘を労う三人――。

○ 屋外・FESバイクコース

露天の円形競技場が広がっている。

遠くに海を望むコース上で、半車体分の  
リードを保って中盤を折り返す瞳。

どよめきと歓声が交差する中、カーブで  
膨らむ隙を突きスイス選手が前に出る。

空気抵抗を減じる敵の薄いタイヤ……

瞳 「舐めるな。――このおとおっ！」

限界まで体を後ろに逸らし、ほぼ水平に  
ペダルを漕ぐ瞳、相手と横一線でゴール。

ビデオ判定の結果……僅差の敗北。

ゆるゆると走り続ける瞳のバイク。

ピットに顔を揃えている機人たち。

野辺 「瞳ちゃんには三年後がある。その先も。

サイバスロンではきつと彼女がエースだ」

夏樹 「……はい」

橙色の消防ズボンを履いた男が近づき、

瞳の体をバイクから抱き上げる。  
彼氏と思しき男の胸を拳で叩き、子供に  
返ったように瞳は泣きじゃくる。

【SUI ∞ - O JPN】。優勝に王手……

○ 体育館・電動義手コース

台所仕事、電球交換とタスクをクリアし、  
最終課題に取り掛かるスイス選手。  
キッチンタスクに手こずる野辺の逆転は  
ほぼ絶望的。――拳を握る夏樹に、  
「……きれいだろ、あの人の右手」

博  
夏樹「え？」

バーテンの真骨頂か、パンを切り缶詰を  
開ける野辺の動作に一切の無駄はない。  
博 「レースの速さで劣るとしても、美しい  
義手捌きなら野辺さんは世界一だ。決して  
負け惜しみを言うつもりじゃなく――」

博 「人と機械を繊細に繋ぐ彼のような人が、  
サイバスの未来を必ず担っていく」

夏樹「未来……」

しばし遅れて野辺がレースを終えると、  
審議のランプが点灯している……  
台所タスク。スイス選手の缶詰を係員が  
検分すると――蓋が開ききっていない。  
disqualification と表示される掲示板。

瞳 「反則負け……やったっ、野辺さん！」

【SUI ∞ - 1 JPN】。相手選手は頭を抱え、  
チーム機人はお祭り騒ぎに変わる。  
無敵のスイスに初めて土が付いた――。

○ 同・電動外骨格コース・スタート地点

夏樹 パワードスーツの袖を通しながら、  
「3対3ならプレーオフだね？」

博 「そうだ。分かっているとと思うが――」

夏樹 「目の前に集中。敬意を払え……大丈夫。  
相手にするのは最強の機人なんだから」  
隣レーンのマヤと並んでソファに座り、  
出走ブザーで同時に立ち上がった。  
転倒を恐れない果敢な杖捌きで、夏樹は

スラローム地帯を先行して抜ける。  
ドアを通過。大声援が背を押して夏樹は  
リードを最大5mほどに広げる——が、  
飛び石手前でピタリと杖が止まる。  
痛めた左腕を見つめ、足下を見る。  
夏樹の視界に黒一色の土砂が滲み出して  
飛び石が沈む。増水した河のよう。  
刹那の、そして致命的な躊躇……  
雄叫びを上げて幻を振り払い、土砂に  
埋もれた足を引き抜いて進む夏樹。  
蹴り足と杖のリズムが崩れ、転ぶ。石の  
一つに頭をぶつける鈍い音が響く。

博

「ナツキいっ」

ルールも構わずコースへ駆け寄る博を、  
夏樹自身が手を上げて押し留める。

夏樹

「触らないで。あそこ——未来が」

博

「……？」

指差す先には走り続けるマヤの姿。  
朦朧とする夏樹を追い越し、乱れのない  
完璧な足運びで飛び石を攻略する。

夏樹

「見て。未来が……、ははっ、歩いてる

……信じられない。あんな急坂を、障害を、  
自分の庭みたいに。軽々と、超えて……」

博

「夏樹……」

よろめきながら夏樹が立ち上がる。  
乱れた歩行で、懸命にマヤを追う。

傾斜を苦にせず越えるマヤ。その体から  
いつしか外骨格は消え、白いドレス姿に。  
坂の多い西欧の街並みを、健全者と同じ  
足取りで歩くそのマヤの幻影——。

夏樹

「この大会もサイバロンも……時代を

創るいちばん前の行列なんだ。その先頭を  
走ってことは……可能性だよ。私たちは  
色んな自由を奪われ続けてきた……立つ、  
掴む、歌う、食べる、歩くこと。支える、  
走る、息を吸う。好きな誰かの傍にいたり、  
自分に勝ちたいと願うことも……。マヤは  
障害者の……人間全ての可能性の未来を、  
今だけはきつと……背負って、歩いている」  
いつでも試合を止められるように、隣を

並んで歩く博に笑ってみせる夏樹、  
夏樹「待ってて。いつかは肩を並べてみせる」

両手を掲げたマヤがゴールに到達する。  
今度こそ決まった総合優勝に選手たちが  
飛び出しマヤを揉みくちやに祝福。

ゴールラインを静かに越える夏樹。

リタイアせず走り抜いた彼女に全方向の  
観客から送られる惜しみない拍手……

ヘルパー戸沢や豊河社長の姿も見える。

夏樹はそっと目を閉じ、息をつく。

夏樹 M「終わってみれば全勝優勝こそ逃した  
ものの、本命スイス大学チームの圧勝で  
ヒューマスロン・ジャパンの第一回大会は  
幕を閉じた。……大会最高の盛り上がり  
を見せたのはこの後……最後の試合となつた  
脳コンピュータ・インタフェースレース」

○ 同・BCIレース・操作席

アバター2体が抜きつ抜かれつ、頭上の  
大モニターでデッドヒートを繰り広げる。

夏樹 M「去年のサイバスロン銀メダリスト、

スイスチームの大エースと接戦を制し――

江場さんが殊勲の初勝利を挙げた瞬間――

江場の顎から大量の汗が滴る。

127秒、大会レコードでの勝利――。

天を仰いだ江場が声を限りに咆哮する。

【SUI 4 - 2 JPN 試合終了】の電光表示。

チーム機人は優勝したように喜び合う。

○ 同・表彰台

2位表彰台の夏樹たちをマヤが手招き、

1位のスペースで一緒に写真撮影。

3位チームも集まり和気藹々とする中、  
シャッターが切り取った集合写真が――

○ マンション・夏樹の部屋（数週間後）

ベッドサイドの写真立てに飾ってある。

T 「8月」

毛布に包まれ眠りこける夏樹。

床で鳴る電話。手探りで掴み、出る。



江場も手元の液晶端末を有線で接続し、瞳の代わりにカーナビを入力する。  
夏樹M「二人は引き続きチーム機人に所属し、サイバスロン出場を目指している。実力とルックスを兼ね備えた瞳ちゃんの写真集を売り出す企画も上がっているそうぞ」

○ 釜石駅に差し掛かるワゴン  
入口に加藤、河野。右手を振る野辺――  
装飾的な電動義手を今は外し、リアルな手を模した製品に切り替えている。  
夏樹M「河野さんと加藤君は、本業の陸上でパラリンピック出場権を争っている。当然、野辺さんも2020年のキャプテンとしてプレーを続けると思つてただけぞ……」  
車が停まつて三人をピックアップアップ。

○ 大学・人機共同研究科・研究室（回想）  
取り外した電動義手と辞表を机に置き、博と夏樹に想いを打ち明ける野辺。

野辺「ヒューマスロンが最後だと決めていた。郷里のお袋、痴呆がいよいよいけなくてね……僕がお世話を見なきゃならない」  
夏樹「お独りですか。ご兄弟とか……」

野辺「――バリアフリーだ機会均等社会だと叫んでみても、障害者への世間の風向きが一朝一夕に変わるわけじゃない。この上は一日も早く電動義手を実用化して、介護に役立てるようにして貰わなくちゃな」

博「野辺さんのデータを無駄にしません。完成したら飛んでいってお届けしますよ」  
野辺「頼むよ。僕が介護されるより前にね」  
二人は左手で固く握手を交わす。

○ 釜石・復興現場  
ワゴンのバックドアを開け、タラップを伝い車椅子の夏樹がおおぞと降りる。  
――かつて半身の自由を奪われた土地。校舎の外観はすっかり建て直され、もう



夏樹は顔を強張らせて振り向く。

○ 同・仮設事務所

三人の刑事と卓を挟む夏樹。  
岡の死亡当夜に会った刑事の姿もあり、  
労るようにならずながら喋る。  
夏樹は白目を真っ赤に充血させて聞く。

○ 同・校舎裏

外骨格を着て煙草を燻らせる夏樹。  
博が奪って吸殻スタンドに捨てる。

博 「約束したからな。お前の旦那と」

夏樹 「これが最後。酒はあの夜でもう止めた。

夢枕で大ちゃんに叱られそうだから」

「そうか」と博。しばし沈黙の後、

夏樹 「捕まったって、メトロの男。あの人が

命を失うきっかけになった……しらふじや

虫も殺せない小心者。ひどく酔ってて何も

覚えてないって話したみたいだけど」

博 「ありがちな話。最低の言い訳だ」

夏樹 「……自首したらしいの。家族と一緒に」

○ 市警察署・応接室

体を震わせ、聴取に応じる中年男に妻と  
中学生らしき娘が寄り添っている。

夏樹の声 「長女が岡大輔の大ファンで、娘に

泣かれて罪を償う気持ち固めた。彼女が

持ってたヒューマスロンのビデオを観て、

自分は何てことしたんだろう。何て大きな

命の未来を消してしまったんだろうって」

○ 復興現場・海の見える小道（夕）

夏樹の頬を土混じりの涙が伝う。

夏樹 「憎み切れないよ。取り返せない罪の、

懺悔と後悔の重さは私にだって分かる――

私もあんたを突き落としたんだから」

懐から模型の「鉄人」を取り出す夏樹。

かつて博から奪いかけた品と同じ……

夏樹 「弱い犬ほどもっと弱い獣を見つけて、

虐めるの。ごめんね。ごめんなさい。私も

あなたの未来を消すところだった……」

差し出された鉄人を博は受け取る。

博 「――檻の虎なら可愛いもんだ。まして猫なら、咬まれて傷つく心配はない」

夏樹 「え……？」

博 「きつと怖いんだよ、皆。無力な猫だと思つてた相手が、突然牙を剥いてくること。檻を破つて虎が飛び出すことも……だから虐められっ子はリーダーに逆らえないし、障害者は健全者に楯を突いてはいけない」

夏樹 「機人が人を超えてもいいけない？」

博 「障害をもつ身でオリンピックに出たり、戦地で人のために働くのもまずい。弱者は弱いまま、可愛い猫であれって話だ」

夏樹 「……勝手だね、そんなこと」

博 「技術は猫を虎に変える。機人がもつと力を付けて健全者を上回るようになれば、危険な一線を越えてしまうかもしれない」

夏樹 「でも、私たちにはユマニテがある……四年に一度、それを表現するための舞台も」

博 「サイバスロンを指す気はないのか？」

夏樹 「分らない。家を建て直して私の傷が塞がるわけじゃない。だけどあの日余震に飲まれたままの私がいる。圧倒的に無力な私が眠ってるの。そいつの横っ面、甘えた健全者の私を張っ飛ばして東京まで連れていく。参りました、もう負けたって」

博 「……」

夏樹 「いつか胸を張って、今度はマヤの隣で。また先頭を走れるとしたら――きつと」

遠く、出発を促すクラクションが響く。

夏樹 「あ……」

博 「時間だ。また来月に続きを話そう」

夏樹 「スーツはお返ししなくちゃだよね？」

外骨格の足を名残惜しげに撫で、夏樹は爪先立ちにうーんと伸びをする。

夏樹 「一つだけ、機人でないとできないこと」

咄嗟に支えようと屈む博の髪を上げて、そつと鉤裂きの傷痕に口づけた。

博 「……」  
夏樹 「なんか言えってばさ」  
博 「意外と高かったんだな、身長」  
夏樹 「ばあか。——よろしく、フリークスに」  
博 「いつでも席は空けておく。言つたら、チーム機人は来る者選ばずなんだ」  
夏樹 「また会いましょう。伊能博士」  
機械の奥、肌を合わせて抱擁する。

○ 同・表（夕）

仲間を乗せたワゴンを見送る夏樹。  
ちぎれんばかり手を振る瞳に、振り返す。  
車椅子で独りぼっち、夏樹が佇む。  
凧いだ海を見つめるその視界……  
小さくなつていく車に、ふと震災の年の  
油圧シヨベルが重なつて見える。  
振り返る夏樹、校舎は瓦礫の山と化し、  
黒々とした土砂が足下に広がる。  
しかし恐れはなく、躊躇もない。  
体育館のあつた場所へと車椅子を進め、  
あの日の校舎にもう一度、手を掛けた。  
イメージの中で、大きく進化した未来の  
パワードスーツを身に纏っている夏樹。  
なめらかな動作で瓦礫を掴み、脇に積む。  
ひたむきな顔に汗の滴を浮かべ、夏樹は  
たった一人の復興を力強く続けていく。  
——  
機人の体が夕陽に輝いている。

（了）